

第三節 体 育

滝川演武場 明治二十三年七月、屯田兵の移住と同時に第三中隊でも第四中隊でも、兵事教育の一環として統剣術、剣術の指導を実施していた。しかし、明治三十年四月一日をもって屯田兵は全部後備兵役に編入されるようになったので、滝川の武術は衰退のきざしが見受けられた。

時の屯田兵第二大隊長陸軍屯田歩兵少佐佐藤当司は、この情勢を歎き東奔西走して、遂に明治三十一年五月、滝川演武場を一の坂に建設した。道場は間口四間、奥行七間半建坪三〇坪のもので、この工費には約六百元を要し、財源はすべて兵村並びに市街地有志の寄付によったものである。

館長には佐藤大隊長が推薦され、師範には一刀無声流の剣客坂本定山を招へいし、盛んに武術を練磨した。憲兵曹長滝本儀三もまた斯道の達人であって、つねに演武館に出入りして門弟を引立て、これにより滝川の武道は大いに盛り上った。

明治三十三年十月、佐藤当司が歩兵第二八連隊第二大隊長に補され旭川に転出したので、もと三等軍医正大竹康造が二代目館長に推され、また滝本儀三も明治三十二年四月、旭川憲兵隊に転任していったので、あとは坂本定山ひとり指導に当たった。当時の館員は三百余人を数え、屯田兵村の名に恥じず、青年の志気がいかに高揚していたかがうかがわれる。

演武場教授の坂本定山は旧水戸藩士で、旧將軍家御指南役桃井春藏から鏡新明知流を学び、更に酒井雅楽頭の師範浅利又七郎から一刀流を学んだ。諸国を遍歴して感ずるところあり、ついにこの二流を合わせ新しく一刀無声流をのみ出し、大いに修業練磨し足跡の至らぬ所がないくらいであった。当演武館に招へいしていたころは、年も早や老いたようであったけれども、勇氣は少しも衰えず、清貧の中に平然と武術の研究に熱中するという剣客であった。

明治三十六年五月、坂本定山が増毛尚武館教授に招へいされて滝川を去った後の滝川演武館は、後継者がなく行詰りを来した。

大竹康造以下幹部がいろいろ協議した結果、ついにこれを滝川警察分署に譲与することに決定し、演武場は分署の付属建物として移転し、主として警察官の武道練習に当て町民一般のための演武場はなくなってしまった。

しかし、町民の間には武門武家の出をもって組織された屯田兵を骨子に発展してきた滝川町に、演武場が一つもないことは遺憾であるという声が起こっていたが、この実現に乗り出して奔走するものがないままに年月を重ねていた。

大正九月四月、滝川中学校が開校し、剣道指導として松村武彦が赴任以来、青少年の武道熱は高まり、またそのころ滝川警察署巡査小島林蔵を師範とした滝川振武会が発足し、ここの演武場で指導を受ける青少年もしいに多くなった。

大正十一年、佐々木兵庫は、演武場が狭隘で青少年が充分練習できない状況をみて、小島林蔵、松村武彦らと相談し、広小路印刷所

裏に在った撞球場が空家になつてゐるのを借り受け、これを滝川振武会支部として青少年を指導、師範は、小島林蔵(四段)、松村武彦(四段練士)、佐々木兵庫(四段練士)で、少年の学ぶもの五〇名をくだらぬ盛況であつた。

昭和八年、滝川警察署に勤務していた吉村五郎(五段練士)が本通り三の遠田馬車店裏に、滝川練武館道場を開いて振武会支部に対抗して指導をはじめ、その指導を受けるもの三十余名に達した。

しかし吉村師範が、昭和十三年他に転任するようになって、練武館は閉鎖された。

昭和十三年、滝川警察署長中尾金蔵は、演武場が狭隘かつ老朽してきたので、管内有志から寄付金七、三五〇円を集め、同年八月三十一日、演武場七〇坪を新築した。

日華事変、太平洋戦争下にあつて武道熱は盛んになつたが、戦況は次第に不利となり、国土防衛が重大となり、昭和十八年頃から中断の形となり、昭和二十年八月終戦とともに軍国主義排除の理由から剣道、柔道は禁じられ、この会は自然解散となつた。

滝川体育会 高畑宜茂が広小路に運動具店を開業して以来、庭球に野球に多くの犠牲を払つて、その振興に奔走した。

当初庭球同好の士が集まり佐藤勘次郎裏の滝門コートで、この道を楽しむ程度であつたが、大正九年滝川体育会が結成されてからしだいに興隆の緒についた。

滝川体育会々則 大正九年

一、本会ハ当町青年ノ体力気力ヲ鍛練スルヲ以テ目的トス

二、本会ハ当町青年ヲ以テ組織シ、滝川体育会ト称ス

三、本会ニ左ノ六部ヲ設ク

野球部、庭球部、徒歩部、剣道部、柔道部、スケート部

四、本会ニ左ノ役員ヲ設ク

会長一名、副会長二名、評議員若干名

五、補則 (一)会費ハ年三回徴収シ一回ニ金一円トス

(二)会費ハ運動器具ノ購入、修繕其ノ他会ノ事業ニ支出ス

滝川体育会役員

会長 渡辺忠四郎(町長)

滝川市(町)体育協会

昭和二十四年五月一日、滝川町体育会として出発したが、昭和二十八年十月二十八日、滝川町体育協会と改称し現在に至る。

滝川市におけるスポーツ団体を総括し、スポーツの普及振興のため必要な事業を行うとともに、その設置するスポーツ施設を適切に運営し、もつて市民の心身の健全な発達と本道におけるスポーツの普及振興に寄与することを目的としている。

昭和二八年当時の傘下団体 野球部、庭球部、卓球部、籠球部、バドミントン部、剣道部、柔道部、拳闘部、陸上競技部、スキー部、スケート部、フォークダンス部、弓道部、山岳部、ユースホステル部、銃剣道部、水泳部

昭和五二年一二月現在加盟団体 滝川軟式野球連盟、滝川軟式庭球連盟、滝川卓球連盟、滝川バレーボール協会、滝川バスケットボール連盟、滝川バドミントン協会、滝川剣道連盟、滝川柔道連盟、滝川アマチュアボクシング連盟、滝川陸上競技協会、滝川スキー連盟、滝川山岳連盟、滝川銃剣道連盟、滝川射撃協会、滝川弓道連盟、滝川体操連盟、滝川ソフトボール協会、滝川スポーツ少年団本部、滝川朝野球連盟、滝川カヌークラブ、滝川水泳協会

歴代会長 1、神部俊郎 2、佐久間貞江 3、神部俊郎(現在)

江部乙町体育連盟

昭和三十九年度に全町各職場、グループ等の協力を得て基礎調査を実施し、昭和四十年六月四日に、江部乙町

直結したスポーツの振興を図るため、体育指導委員を設置した。

その任務とし市町村教育委員会等の行う体育事業に協力、また社会教育関係団体、職場等が行う体育活動に協力、あるいは指導をなすと共に各団体の行う体育活動の連絡を図るもので、町教委の推せんにより道教育委員会より委嘱された。

昭和三十六年六月十六日、スポーツ振興法が公布施行により、江部乙町体育指導委員会に関する規則を施行、体育指導委員を設置、市町村におけるスポーツ振興のため住民に対しスポーツ実技の指導その他スポーツに関する指導助言が行われた。

滝川市剣道連盟 剣道は我が国の伝統として古くから奨励され、心身の鍛錬に欠くべからざるものとして、かつての旧制中学校時代は柔道とらんで正課にとり入れられたこともあった。

終戦後しばらく禁止されていたが、純粹のスポーツ竹刀競技として学校体育上に取り入れられることが認められるようになり、ようやく復興へのきざしが見え出し、昭和二十八年には学校剣道として指導できるようになった。

昭和二十四年、当時北海道剣道界の最高権威であった本間治助範士が滝川に転入されるや、剣道愛好の士は期せずして本間治助のもとに集まり、滝川剣道同好会を結成、世をはばかりながらも熱心な稽古が続けられ、本間範士を会長とし、小島林蔵、佐々木兵庫、越沢三郎、松本源八郎、少覚納、小坂栄蔵、本郷徳郎などが名を連ねており、これが今日の滝川剣道連盟結成の大きな原動力となったのである。

昭和二十六年に滝川剣道同好会は滝川剣道倶楽部と改称し、会長に久保茂雄を推し、公然と稽古が行われるようになった。

昭和二十九年四月一日、滝川剣道倶楽部は全空知剣道連盟の発足に呼応し、滝川剣道連盟と改称、当連盟では剣道活動の重点目標を専ら青少年の剣道指導に置き、かつて滝川人造石油の私立青年学校主事で校長を兼任していた坂田敏雄教士を主任として、学校剣道指導要目に準拠し、滝川少年剣道指導要領を立案、周到な計画に基づき青少年剣道指導に着手、松庫商事所有の為徳殿及び滝川警察署道場で、青少年を中心とし一般初心者の基本指導を開始した。

坂田教士の熱意と剣連幹部の献身的な協力により一般市民の理解も年をおって高まったことはいうまでもない。

特に、昭和三十二年度に会員の吉野茂久五段が、全日本剣道選手権大会に北海道代表として派遣され、万丈の気焰をあげており、また為徳殿開館と同時に初歩指導を受けた、当時一四、一五歳の少年の中から昭和三十三、四、五年度の三カ年連続して北海道一般有段者剣道選手権を獲得したことも特筆すべきである。

昭和三十七年に滝川児童会館(現総合福祉センター)に道場を移し、同三十八年になって系統的な基本指導の徹底を期し、毎週二回の稽古が行われ、優秀剣士の輩出を見たことはいうまでもない。

殊に、滝川市剣道連盟では、昭和三十八年から三年連続して東北北海道対抗剣道大会に北海道代表選手として選抜され出場した、小坂栄蔵教士六段、又当時滝川西高校教諭の茂田敏夫教士七段の如きは、国体剣道大会を初め全国都道府県、全国教職員、東北、北海道

對抗、全日本選手権大会などに北海道代表選手として出場すること既に十余回、実に超人的活動を続け、郷土が生んだ青年剣豪とし後進の士気高揚に大きな力となっている。

此等優秀剣士を育て、剣連の運営と剣士の資質向上に心魂を傾け現在は後進に道を譲られた坂田敏雄教士七段、並びに会長として人格識見高き久保茂雄教士の業績は、誠に大といわねばならない。

昭和五十一年に至り、当剣連に函館西高校から滝川高校教諭となつた北海道剣道会の中堅といわれる倉地基雄教士七段を迎え、滝川剣連も更に充実発展、毎年行われている全道団体優勝大会には優秀な成果を収めている。

昭和五十三年四月、全空知剣道連盟会長に滝川剣連の創設に貢献された少覚納教士六段が就任、滝川剣連は創立以来三〇年の今日、益々その責務に燃え、先達者の偉業を継承、会員献身的協力のもと精進練磨育成に当たっている。

特に、少年剣士は緑町児童会館、朝日町児童会館、滝の川福祉会館、青年体育センター等を利用し、三〇〇名を超える会員が、週二回〜三回稽古に励んでおり、その数も日々増加の一途を辿りつつ盛況であり、市当局に対しても早急に武道場設置の請願をしている。

昭和五十四年十二月現在、会長田中君太郎、主なる指導者には、教士七段倉地基雄、教士七段茂田敏夫、教士六段少覚納、教士六段小坂栄蔵、教士六段鈴木六郎、教士六段松田知範、教士六段田中栄一、教士六段山田博彦、教士六段豊田忠、教士五段山田鶴治、錬士五段井上浩、錬士五段平沢勇の堂々たる陣容であり、会員の有段者

四一名、有級者一〇名、少年部は二〇〇名となっている。

滝川柔道連盟

滝川の柔道については、明治・大正における経過や資料がなく、その多くは正課としての柔道を取り入れていた、

旧制滝川中学校の活躍の中に見る程度である。大正十三年度の第一回卒業生には尾形、越川、植松、照井、蛮谷の有段者が顔をならべ、各年度若干ながら有段者がいたが、第六回生に増永・中田・松原が目立つ。昭和十年、豊原中学校から転校してきた阿部隆は三段、同十六年、阿部憲彦が神宮大会に出場などの記録を伺い知る。

滝川の戦前に於ける柔道は、日本講道館と武徳会によるものほか、一部に渋川流、拓磨流などを修得したものが在任していた。

戦時中柔道の指導的立場にあったのは警察であったが、昭和十四、五年頃は岡山栄治四段が柔道の指導権を握っていた。同十六年ころから滝川人石の小林文雄五段が活躍していた。

終戦と同時に柔道も禁止されたが、昭和二十一年頃からスポーツとして、また護身術としその普及が望まれ、手嶋主二郎・中川得三郎が空知管内に呼びかけ、昭和二十五年三月「空知柔道連盟」を設立し、柔道の発展振興に尽力し道内でも強力な支部となり、空知柔連は全連大会一般・壮年の部・各三回優勝の基いが培われた。

敗戦後の混乱にもめげず心身を鍛錬して青少年を指導し、不良化防止の一端を担い、健全な社会づくり、立派な人格をつくる目的で発足したこの組織も、中川次席の転任により、一時停とんの状態があり、この状態を憂えた高畑良助などは、再建に奔走、滝川工業高校町田幸雄四段の尽力を得て、次第に隆盛をとりもどし、今日の発展

となった。

なお、町田四段は、昭和三十三年全日本選手権大会に北海道代表、三十四年国民体育大会には北海道代表となつて、大いに活躍した。

会長 神部俊郎 会員二五〇名

昭和四十六年四月一日、滝川柔道愛好会と江部乙游塵会柔道部が合併し、新出発をした滝川柔道連盟は、滝川市に在住する青少年（小学生以上）を対象に、滝川地区は毎週月、木曜の二日間、緑町の児童会館で、また、江部乙地区は毎週火、金曜の二日間、江部乙改善センターで練習している。

なお、両地区共北海道柔道少年団に、滝川地区四〇名、江部乙地区二〇名が加盟、毎年二、三回小・中学生による対外試合をも行っており、好成績を示す。

最近成績中、主なものとして昭和五十四年六月札幌市であつた全道少年大会三位、同年十月の富良野地区大会の優勝がある。

結成当時は有段者一五名、その他二〇名、現在では有段者五〇名、その他六〇名、指導者として

八段手嶋圭三郎、七段川田一友、六段島倉敏雄・丸山治人・佐藤竹治、五段川上章夫・水林清治・高橋昭、四段森川岩夫などが当たり、

道場指導員、滝川地区責任者高橋昭、江部乙地区責任者佐々木金治（五段）、指導員宮崎藤雄（五段）、本郷武（四段）、品田遺三（二段）などが、青少年、一般の指導と柔道の振興発展に尽力している。

滝川軟式庭球連盟

大正九年、高畑宜茂運動具店主の奔走によつて、滝川体育会の一部門として発足したのが最初で、滝門クラブコートで早朝あるいは日暮近く相集まつて練習を続けていた。

昭和二年七月、高畑運動具店主催で、第一回北部空知庭球大会を開催するに当たり、一般から寄付金を募り滝門クラブのコートを修理し金網を張り、器材などを取揃え、美唄以北の各町村に案内し、高畑寄贈の優勝旗争奪戦が華々しく開催された。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 第一回（昭二）上砂川 | 第九回（昭一〇）空知礦 |
| 第二回（〃三）茂尻大倉 | 第一〇回（〃一一）滝川滝門 |
| 第三回（〃四）茂尻大倉 | 第一一回（〃一二）茂尻礦 |
| 第四回（〃五）滝川滝門 | 第二回（〃一三）不詳 |
| 第五回（〃六）歌志内空知礦北陽 | 第一三回（〃一四）不詳 |
| 第六回（〃七）滝川滝門 | 第一四回（〃一五）夕張炭礦汽船 |
| 第七回（〃八）茂尻礦B | 第一五回（〃一六）幌内礦炭礦汽船 |
| 第八回（〃九）滝川滝門A | |

太平洋戦争に突入してから、選手もいなくなり中絶の止むなきに至り、滝門クラブコートは戦争中野菜畑と化し、長い間中断されていた。

昭和二十六年同好者が相談しコートを町役場隣接地に設備して復興をはかったり、またその三年後には、農協用地を借りて二面のコートを新設、昭和二十九年八月、国民体育大会参加のため来道した軟式庭球界我が国の第一人者、東京代表態野御堂らを招いて、模範試合及びコーチ会などを開催して、庭球の普及発展を図ったが、たまたま倉庫建築のため借地返還を余儀なくされ、適当な代替地のないままの状態となった。

昭和四十四年四月三十日、各職場より連盟をつくる話がちあがり、自衛隊、北電、機関区、市役所、市立病院、教職員、郵便局などの職場団体が結成、会員登録により加入、加盟、滝川軟式庭球連

盟の設立をみた。

会長 武田勝夫（昭和四四年発足以来、五四年現在）

なお、武田会長は昭和七年以来、戦時中のやむない中断はあったが、戦後においてもいち早く、テニスの復興普及に尽力、昭和四十四年会長になってから、ママさんテニス、ジュニアテニスなど、初心者育成にも努め、四十七年には中空軟式庭球連盟を創設、その会長におされている。現役を退いたといえ球歴四十年、五十五年二月には日本軟式庭球連盟より地方功労賞の荣誉に輝いた。

現在、会員六〇〇名、夏は毎朝一〇〇人以上のテニス愛好家が市営コートで練習、五十年滝川ママさんテニスクラブが全道初優勝をしている。

指導者

名誉指導員 山尾秀次 名誉指導員 脇坂一平、指導員 後藤則広、
一級審判員 大森紀克、準指導員 柿崎淳子、その他 二級審判員 田中從道、渡辺高明、小林昭弘、芳賀都子、酒井隆一、佐野洋子、藤本洋子、後藤昭子などがある。

ママさん教室は週二回午前中（年中）、初心者、ジュニア教室毎週日曜日（五月初旬〜十月中旬）研修・練習を行う。

主な戦績

昭四七、九 全道地区対抗（滝川市）三位、昭四九、七 全道選手権（滝川市）準々決勝、昭五〇、八 全道ママさん（札幌市）優勝、昭五〇、九 全日本社会人（松本市）出場、昭五一、六 全道都市対抗（江別市）準優勝、昭五一、七 全道ママさん（旭川市）三位、昭五一、九 全道親子百才混合夫婦大会（札幌市）優勝、準優勝、昭五二、七 全道ママさん（滝川市）優勝、昭五二、一〇 全国ママさん（川口市）三回戦出場、昭五二、九 全道親子百才混

合夫婦大会（札幌市）準優勝、昭五三、九 全道親子百才混合夫婦大会（札幌市）優勝、昭五四、七 全道選手権（岩見沢市）三位、昭五四、七 全道スポート（岩見沢市）優勝、昭五四、九 全道都市対抗（滝川市）三位、昭五四、一二 全道中学校新人戦学校対抗（滝川市）江陵中女子優勝

滝の川公園のコート八面は、当連盟が運営・管理に当たっている。

野 球

野球が滝川町で盛んになり初めたのは、大正末期からで、大正九年滝川中学校が新設され、滝中グラウンドで野球が見られるようになったのは大正十一、二年からである。

滝川の社会人野球となると、大正十三、四年頃で、大正十四年滝川駅長に熊谷綾雄が赴任、自ら陣頭に立って滝鉄チームをつくり、歌志内、奔別炭鉱チームと交換練習試合をするようになった。この他、滝川カップというチームもあり活躍していた。

当時、北海タイムス社（現北海道新聞社）が主催する全道少年野球が大正十五年から地方予選を行い、その勝者が札幌で覇を競うようになり、野球熱はしだいに高まり、また一方では小樽新聞社が主催する実業団野球が盛んになり、北海道野球界の双壁として、シーズンになると全道民の関心を集めたものであった。

昭和三年六月、高畑運動具店が主催し当町の料亭扶桑軒高橋最治寄贈の優勝カップ争奪をめぐる、北部中空軟式野球大会が開催され、それ以来毎年の行事として行われた。出場チームは年により違いがあるが次のとおりである。

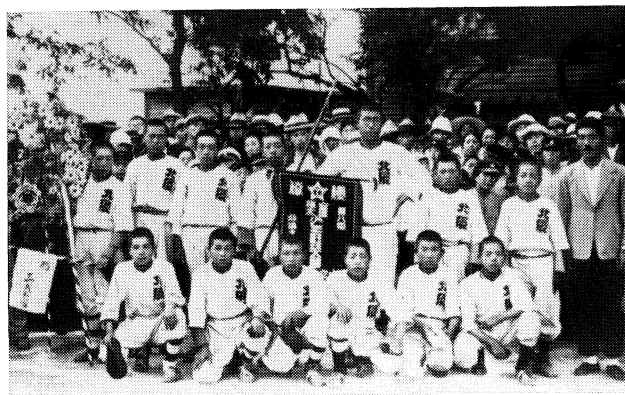
砂川三井木工場、深川倶楽部、美唄三菱楓倶楽部、盟友倶楽部、美唄三菱A、美唄三菱B、滝鉄クラブ、白樺クラブ、滝門倶楽部、滝川曙クラブ、白楊クラブ、茂尻極光クラブ、滝川つばさクラブ、深川モダンクラブ、美唄沼門クラブ、上歌志内野球部、江部乙北辰クラブ、滝川ユニオンクラブ、上芦別協和

クラブ、砂川駅チーム、奈井江野球クラブ、茂尻極洋クラブ

試合は七回戦で、鉄道グラウンド、滝中グラウンド、一小グラウンドで予選をし、滝中グラウンドで決勝戦を行う熱戦を展開、これは昭和十一年第一〇回大会まであったようである。

昭和六年七月、滝川町野球協会が設立され会則も制定、会長には津田美之助がなっている。

少年野球で滝川第一小チームが、岩村、近藤バッテリーの時、全道大会に駒を進め準決勝まで勝ち残った。また、滝川劇場主鈴木庄太郎が多くの犠牲を払って少年選手を激励し慰安し奔走したことは有名である。



第8回全道少年野球地区代表北辰小チーム

滝中の野球では、昭和五、六年ごろ、門山兄弟時代が黄金時代で、全道大会にも出場、北海中学とならんで北海道のトップクラスであり、一般社会人野球チームとやっても互角の試合をしていた。

江部乙における野球熱は、昭和六年の第八回全道権太少年野球大会に北辰小学校チームが地区代表権を得て、全道大会に出場する前後に急速な上昇を示した。

中空知代表決定戦は、滝川第一小学校グラウンドで開かれ、強豪新鋭九チームの熱戦、各応援団の応援合戦は華々しいものであった。

全村あげての後援会結成、練習また練習が結実し、夢にまで見た北大グラウンドにおける全道大会出場、村は野球話であげられ、当日は札幌まで銀輪をつらねて応援にかけつける。第一戦後志地区代表黒松内を三対〇で撃破、第二戦は日高地区代表佐留太に二対〇で惜敗涙をのむも、中空知に北辰ありと校名をとどろかした。

しかし、本来の目的から逸脱し、学校教育にまで介入せんとする父兄の感情も過熱化し、数々の弊害が各地で指摘され、遂に第九回をもって少年野球全道大会は中止をみた。

数年後、これら少年野球に精進したものが、再度白球への感触に魅せられ、江部乙ベースボール協会を設立、北空知青年野球大会を年々定期的に開き覇を競い、各地にも転戦江部乙協会の名をとどろかせた。

日華事変、太平洋戦争に入って野球は一時中絶の状態にあったが戦争も終わり昭和二十年に北海道軟式野球連盟空知支部が設立された。

滝川軟式野球連盟 滝川では高畑良助を中心に、昭和二十一年十月一日、滝川軟式野球連盟が誕生、同時に空知支部に加盟した。

昭和二十三年、空知支部が南・北に分かれ、南空知支部が岩見沢、北空知支部となり、北空知支部の事務所を滝川町本町西山威に置いた。会長としては、鈴木庄太郎、石川某、佐野一夫、佐久間貞江がなり、昭和三十四年から五十三年まで二十年間、神部俊郎がっ

とめ、五十四年より三浦光正となる。※西山威は昭和五年三月全日本軟式野球連盟より功労章受章

行事としては、東日本準硬式大会予選、全日本天皇賜杯軟式野球大会予選、国体軟式野球大会予選、国体硬式野球大会予選、滝川市春秋職場野球大会などが行われているが、滝川倶楽部は、昭和二十三、四、五年三回連続北空知予選会に優勝した。

昭和三十年、国体準硬式北海道大会に滝川球友、三十二年の東日本準硬式北海道大会には滝川クラブ、三十四年国体準硬式北海道大会に滝川鉄道クラブ、四十年の東日本準硬式北海道大会には中空知



第2回全国野球大会北海道予選優勝

信用金庫、滝川鉄道クラブ、四

十五年の常陸宮杯北海道大会に滝川北電、滝川鉄道クラブが出場、四十八年の国体北海道大会が浦河町であった時、滝川代表の滝川市役所チームが準優勝となる。

昭和二十四年八月、空知川畔に工費四〇〇万をもって滝川球場がつくられ、八月二十日球場開きを行い、鈴木庄太郎が初代管理人になった。

開設以来スポーツ愛好家に大いに利用され、球場の収容力も

近隣にない大きなもので、硬式野球、軟式野球の大会をはじめ各種の野球試合が行われ、野球ファンを楽しませた。

昭和二十五年、阪神・中日戦を呼んだが、雨で中止となり、昭和二十八年八月九日、午後二時から滝川球場でセントラルリーグ公式試合、広島カープ対名古屋中日ドラゴンズ第十八回戦が行われた。

セ・リーグの第十九節は全球団を本道に迎え九試合が行われ函館、室蘭、旭川、夕張、苫小牧、札幌の六市と当滝川町の七カ所で行われたが、広島対中日の対戦はその白眉の一戦ともいべきもので、今までの対戦成績は中日七勝、広島六勝という実力伯仲の好試合で、滝川町内はもちろん、付近市町村野球ファンが球場せましと押しかけ、すこぶる盛況裡に終わった。

そのころ、プロ野球の公式戦が市でなくて町で開催されたのは、滝川が初めてくらいで、これだけの球場をすべて人力でやったもので滝川クラブを中心とする審判団の人々などは、連日のように奉仕作業をし、立派な球場を完成したのである。

また、往年滝川の社会人野球に活をいれた一つとし、人石野球部のことも忘れてはならない。当時この大きな会社にも選手も職員として来滝、そうした人々のコーチや刺激で、滝川のレベルが上ったことは事実で、戦後、人石野球部が中心になって「オール滝川」を結成、国体道大会に三年連続出場をしている。

最近滝川も朝野球がブームで、シーズンになると一〇〇以上の草野球チームが、朝野球を楽しむ盛況ぶりである。

滝川陸上競技協会

昭和十年四月、滝川陸上競技部が同好の士

(滝川高) 棒高跳 四メートル 二位、宮北芳子(滝川高) 円盤投 三二メートル二四 優勝、男子四〇〇メートルリレー(滝川高) 松尾、宮部、田湯、藤田 四五秒八 三位、全国大会 田湯富康(滝川高) ハンマー投 五四メートル一〇 三位入賞、国体全国大会 田湯富康(滝川高) 円盤投 五〇メートル八 優勝、全道学生新人大会 田湯富康(滝川高) 円盤投 五二メートル四〇 優勝、道高校新記録樹立、全空知駅伝大会一般の部 陸上自衛隊滝川駐屯部隊 優勝、高校の部 滝川商業高校 優勝

昭和四三年度高校の部全道大会 宮北芳子(滝川高) 円盤投 三一メートル六四 六位、藤田直己(滝商) 八〇メートル 四位、全国大会参加、北海道百年記念空知スポーツ大会 八月九日から十一日までの三日間岩見沢市陸上競技場で行われ、多数の選手が参加活躍し上位入賞者を出す、全空知駅伝大会一般の部 陸上自衛隊滝川駐屯部隊 優勝、高校の部 滝川商業高校 優勝
昭和四四年度高校の部全道大会 後藤克博(滝川高) 走巾跳 六メートル六四 五位、藤田直己(滝川商) 八〇メートル優勝、田湯康雄(滝川商) 走高跳 入賞、全国大会 藤田直己 八〇メートル一分五八秒六 八位、道民スポーツ空知大会 男子優勝、空知駅伝大会一般の部 陸上自衛隊滝川駐屯部隊 優勝、高校の部 滝川商業高校 優勝、青年大会全国大会 尾崎文江(江部乙) 走高跳 一メートル三六 四位

昭和四五年度中学の部 増田節子(江陵中) 砲丸投全道大会 優勝、全国大会参加、高校の部全道大会 後藤克博(滝川高) 走巾跳 二位、三段跳 二位、野上雅代(滝高) 砲丸投 四位、全国大会 後藤克博(滝川高) 走巾跳七メートル〇九 優勝、南部忠平杯を受け、又日本代表とし日韓対抗大会(ソウル)に参加し走巾跳で優勝、一般の部道民スポーツ空知大会(ソウル) 男子 優勝、女子 三位、空知駅伝大会 陸上自衛隊滝川駐屯部隊 優勝
昭和四六年度一般の部道民スポーツ空知大会 男子 優勝、女子 四位
昭和四七年度高校の部全道大会 雨谷忠勝(滝川高) ハンマー投 五二メートル七四 二位、砲丸投 一三メートル〇七 四位、近藤匠(滝川高) 八〇〇メートル 二分四秒六 六位、宮下美智子(江部乙) 走高跳 一メートル五五 二位、全国大会参加、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 五位、女子 六位、全空知駅伝一般の部 滝川自衛隊一〇連隊 優勝

昭和四八年度高校の部全道大会 近藤匠(滝川高) 八〇〇メートル 二分四

秒〇 二位、男子一、六〇〇メートルリレー(木本、近藤、森元、宮治) 三分三五秒〇 優勝、宮下美智子(江部乙) 走高跳 一メートル五五 五位、全国大会参加、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 四位、女子 三位、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊一〇連隊A 優勝、高校の部 滝川西高校 優勝

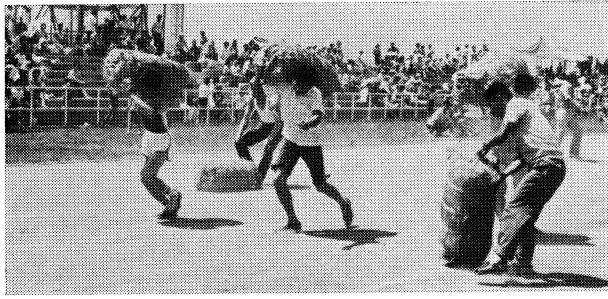
昭和四九年度中学の部全道中学校大会 稲場強(江陵中) 八〇メートルハードル優勝、全国中学校大会 稲場強(江陵中) 八〇メートルハードル 六位、高校の部全道大会 長原昌子(滝川高) 円盤投 三位、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 優勝、女子 一二位 空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊A 優勝

昭和五〇年度高校の部全道大会 佐藤喜倫(江部乙高) 一〇〇メートル一三秒三 入賞、二〇〇メートル 二三秒二 入賞、全国大会参加、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 四位、女子 九位、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊一〇連隊A 優勝

昭和五一年度一般の部道民スポーツ空知大会 男子 五位、女子 一〇位、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊一〇連隊A 優勝
昭和五二年度高校の部全道大会 稲場強(滝川西) 一一〇メートルハードル 四位、全国大会参加、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 優勝、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊A 優勝

昭和五三年度高校の部全道大会 遠藤彰(滝川高) 砲丸投 一三メートル六位、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 優勝、女子 二位、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊一〇連隊A 優勝
昭和五四年度高校の部全道大会 遠藤彰(滝川高) 砲丸投 一三メートル〇七 五位、一般の部道民スポーツ空知大会 男子 優勝、女子 二位、全空知駅伝大会一般の部 滝川自衛隊A 優勝

滝川陸上競技場は、昭和四十九年九月十五日に開設、一周四〇〇メートル、八コース、競技面積二万五、一四八平方メートルの日本陸上競技連盟三種公認の近代的施設で、また、全空知駅伝大会は、昭和三十三年滝川市の市制施行を記念して、滝川市と空知陸上競技協会の共催によって開催された。



俵かつぎ競走

30キロの俵をかっいで全力疾走。まだまだ体力には自信があるぞ



ラジオ体操



走高跳



親子二人三脚

親子だけに息はピタッリ



親子目かくし競走

お父さんにオンブしてもらうのはひさしぶり



走幅跳

<第7回市民体育祭より>

この第一回大会は、昭和三十三年九月二十一日、滝川駅前をスタート地点、拓銀交差点をゴール地点として、滝川〜新十津川〜砂川〜上砂川〜歌志内〜赤平〜東滝川〜滝川の約五十キロメートルのコースで行われ、参加チーム数、レベルのいずれをとって、道内でも有数の駅伝大会とし、現在まで継続して開催され、昭和五十四年度で第二二回となる。

市民体育祭 第一回は昭和三十八年九月十一日、市営球場で開かれ、市内小学校区域とし、第一小(赤)、第二小(白)、第三小(黄)、東栄小(紫)、西小(青)で、年齢別リレー、マラソン、フオークダンス、婦人団体による滝川音頭などが行われた。

昭和三十九年の第二回から、江部乙町との合併第二回の昭和四十七年までは、滝一小グラウンドで合併の年をのぞいては、七月の好天で行われてきた。

「市民ひとりひとりが、スポーツに親しみ市民の健康と生活の向上を図り、市民相互の友愛と信頼を深めることによって、明るい健

第7回市民体育祭

家族そろって参加しましょう

7月3日 市営陸上競技場

スポーツを通して市民の健康と生活の向上を図り、市民みんなが友愛と信頼を深めて明るく健康な滝川市をつくらうと始まった市民体育祭もこととして7回目を迎え、7月3日（雨天のときは7月17日）の午前9時30分から市営陸上競技場で繰り広げられることになりました。初夏の1日を家族そろって、また町内会や職場ぐるみで市民体育祭に参加してみませんか。

競技に参加される方は、6月18日までに青年体育センター内社会体育課（☎3—3842番）、市役所内教育委員会事務局（☎3—1234番、内線307・311番）、江部乙支所（☎江～2131番）へお申し込みください。なお、小中学生は学校で受付します。また、レクリエーション種目については、当日も会場で受付しますのでお参加ください。

当日は、各町内と陸上競技場を連絡する無料バスを運行しますので、ご利用ください。時間や運行経路については次号でお知らせします。また、当日は市内5か所で花火を打ち上げ、市民体育祭の開催をお知らせします。

留意事項

- 参加資格の年齢は7月3日現在とします。
- 競技種目は1人2種目（リレー及びレクリエーション種目は除く）まで参加できますが、時間帯がだぶらないよう注意してください。
- 競技参加者には参加賞及び記録証を渡します。（小学校低学年の50mは参加賞のみさしあげます）

第7回 滝川市民体育祭プログラム

順	種目	別	参加対象	性別	順	種目	別	参加対象	性別
1	ラジ[オ]体操		全市民			みんなで走ろう5分間	㊦	一歳以上 30歳以上	男女
2	100メートル	T	小学校 4.5.6年	男女	11	ソフトボール投	F	5.6年 中・高 一般	男女
	走高跳	F	小学校高学年 中学校一般	男女		走幅跳	F	小.5.6年 中・高 一般	男女
3	親子二人三脚	㊦	親子	男女	12	お嬢さん競走	㊦	高一 校	女
4	俵かつぎ	㊦	一般	男	13	なわとび競走	㊦	小学校 1.2.3.4年	男女
5	50メートル	T	小1.2.3年 一般	男女	14	風船運び	㊦	中一・高 一般	男女
6	100メートル	T	中学校 中高一 校 校 般	男女	15	1500メートル	T	中一・高 一般	男
	交通安全札合せ	㊦	一般	男女	16	ヒップバン競走	㊦	高一 校 般	男女
7	ドリブルリレー	㊦	少年団 ボーイスカウト 子供会など	男女	17	ビックボールゴルフ	㊦	一般	男女
8	親子目かくし	㊦	親子	男女	18	パンくい競走	㊦	高一 校 般	男女
9	幼児競走				19	400メートルリレー	T	小.中.高 一 般	男女
10	滝川音頭				備考 Tはトラック、Fはフィールド、 ○はレクリエーション種目				

康な町を全市民で築きあげよう」と、年々によってその種目内容は異なるが、玉入れ、マラソン、幼児競走、札合せ、綱引き、婦人団体による「滝川音頭」をはじめリレーも年齢別、男女、職場、小中と年により趣向を加えたもの、むかで競走なども入れ、また、バトンガールと鼓笛、音楽行進、各種マ스ゲーム、器械体操、銃剣術野試合などを挿入した年もあり、毎回盛会であり楽しい一日でもあった。

昭和四十六年、合併第一回から江部乙（緑）も加わり、東栄（桃）変更それぞれ色とりどりの中にも熱戦、和合と健康に溢れたものであった。同四十八年のみ会場を江陵中グラウンドにしたが、その後第四回の体育祭から会場を市営陸上競技場に移し、従来の対抗競技をとりやめ、記録中心の体育祭となり、新たなくふうと記録向上を目指す、レクリエーション・体力づくりを展開、昭和五十四年で第九回を終わった。

なお、江部乙町民体育祭は、昭和二十八年、開基六十周年記念労働文化祭行事として始まったが、昭和二十九年、町、教委、商工会農協、婦人会共催による全町運動会となり、「健康で明るい町づくりの一環として、全町体育祭を催し、体育、レクリエーションを通して健康と町民の融和と親交を深め、ともに明日への生活向上意欲と力を培う」目的で、全町あげてのものとなった。

しかし、昭和三十年夏の水害で中止のやむなきに至り、その後暫く行われなかったが、七年振りで三十七年七月二十五日、北辰小学校グラウンドで再開した。これも昭和四十年の初めまで続いたが、選

手をきめること等で種々困難も出て、立消えとなってしまった。

・空知外三郡青年大会

空知外三郡とは、夕張郡、樺戸郡、雨竜郡をいったもので、この大会は、大正二年四月一日、空知外三郡連合青年会が発足した年から始められたものである。

これは、空知外三郡全部が一所に集まったのではなく、夕張を中心とする夕張郡が第一方面、岩見沢を中心とする樺戸郡が第二方面、滝川を中心とする空知郡が第三方面、深川を中心とする雨竜郡を第四方面と言って、方面別に行われたもので、今のように交通機関があるわけではなく、てくてく歩いて集まった。

第三方面の大会は滝川の練兵場あとで開かれ、その中、新十津川の菊水公園グラウンドで開催されたのが、昭和九年の第二二回までのうち三回で、あとは全部滝川で開かれている。

この大会の内容は、まず開会行事があり、優良青年会や個人青年の表彰を行い、その後剣道や陸上競技（主として走るだけのもの）を開催した。何といっても九時に始まって三時には終了せねばならない、往復徒歩による集まりであったからである。

とにかく、中空知の十町村の範囲から、その数二、〇〇〇名以上が集まるので壮観、会旗を先頭に堂々の行進、規律正しいもので、大会はほとんど七月初めか六月末で、支庁長や道庁からも人がきたり、有名人の挨拶もあった。

剣道は何といっても新十津川が強く、新十津川対全町村という形であった。そのかわり陸上競技になると砂川がとて強かった。

この競技には別に優勝旗など出なかったが、町村毎の点数が発表された。足ははだし、白シャツ、白パンツ姿の選手、べんとうのお握りを風呂敷に包んで腰にさげたり、こうもり傘に通し肩にかついで集まった姿は、今はなつかしい思い出である。

滝川バスケットボール連盟（昭和四五年まで滝川市籠球連盟）

北部空知実業籠球大会、北部空知少年籠球大会が高畑運動具店主催で、昭和三年二月、第一小と滝川中で開催され、近郊町村十数チームの参加を得て毎年開催されていたが、昭和十四年第一二回大会を最後に戦争のため中断された。戦後各種球技が盛んとなるに従って、籠球もまた行われるようになり、学校での体育をはじめとして、各職場にもチームを作って籠球を楽しむ者が多くなった。

昭和二十六年四月、籠球連盟が組織され、春秋の大会を毎年行うようになり、その他市の行事に合わせて大会を開いてきた。

昭和四十二年五月連盟規約を定め、その後四十五年、四十六年と改正、現在は昭和五十三年五月施行、「滝川市内のバスケットボール競技の総括団体で、チーム及びその関係者をもって組織する。この連盟構成員の資格は、各大会毎の参加申し込み書により取得する」と、その規約を改めた。

歴代会長

初代 古館 健一	昭和四年度	二代 三上 初夫	昭和九年度
〃	〃	〃	〃
三代 山本 定雄	昭和五年度	四代 本間 鉄男	昭和五年度
〃	〃	〃	〃

(現在)

昭和三十五年の職場対抗籠球大会に参加したチームの名は、次のとおりである。Aクラス（滝川駅、市役所、第一小、第三小、江陵中、機関

区）Bクラス（第二小、明苑中）その他チームのある職場は、工業高校、滝川高校、東栄小・中校、菱雄石炭、商業高校、税務署、職安、信金、空知米穀、滝川ラムネ、米倉商事などがあった。

その後、ルール改正などあり、バスケットボールもスピード化、技術の高度化に伴い競技人口も一時減少したが、連盟の強化策や施設の充実によって、近年参加チームも増加しレベルも向上、江陵中学校の全国大会出場や道民スポーツ空知大会における滝川市の活躍がみられるようになった。

昭和五十三、四年に参加した一般チームは次のとおりである。池田造生花、師籠ク、スワローズ、ふじ交通、市役所、仲買人、トキョウ、市立病院、札幌トヨタ、東龍、不二建設、消防署、秋山愛生館、工業高校教員、北電、自衛隊、ANT、若武者、ふろうじ、ミスターどんべえなどである。

高校男子（滝高、滝西、滝工）高校女子二校（滝西、滝高）中学男子（江陵、明苑、開西、江部乙）中学女子（開西、江部乙）も大会毎に参加している。特に五十四年からは、ミニバスケットボール大会が計画され、男子は第二小、第三小、東小、西小が、女子は第二小、第三小、東小が出場し、チビッ子の活躍に盛んな拍手がおくられるようになった。

昭和五十四年度 市内選手権大会 一般優勝池田造生花、準優勝ふじ交通、高校男子優勝滝川西高、準優勝滝川高校、高校女子優勝滝川西校、準優勝滝川高校、道民スポーツ空知大会二回戦まで、職場対抗ナイター戦優勝池田造生花、準優勝師籠ク、総合選手権優勝池田造生花、準優勝市役所、ミニバスケットボール男子優勝第三小、準優勝東小、同女子優勝第三小、準優勝

第二小、会長杯争奪大会優勝池田造生花、同準優勝不二建設

卓球 滝川で卓球が始められたのは、昭和六年三月三日高畑運動具店主催で、滝川町実業卓球第一回大会が開催されてからである。

昭和八年四月、第一回北部空知卓球も同運動具店主催で開かれ、それ以来年中行事として回を重ねてきたが、戦争がし烈となるにつれて中断されてしまった。

昭和二十三年一月十五日、空知スポーツ社長草浦正己は、卓球が久しい間途絶えていたことを遺憾とし、同好の士を糾合して滝川卓球連盟を結成し、武田会長杯の寄贈を受け第一回卓球大会を同年三月二十三日に開催、それ以来毎年継続し、また文化祭体育行事として行ってきた。

会長武田勝夫 加盟団体一五

その後自然消滅し、市内で卓球大会がなくなったので、昭和三十九年卓球愛好者数名が発起人となり、滝川商業高校今野正義理事長より今野杯の寄贈を受け、第一回今野杯争奪卓球大会を開くことができた。

昭和四十三年、北海道卓球連盟に再加盟すべく働きかけ、九月三十日滝川卓球連盟が結成され、当時一二団体（会員一二〇名）も、同五十四年には、一九団体（約三百二十名）となり、現在では年一〇回各種大会を開催、卓球人口も年毎に増加し盛んである。

会長 今野正義 昭和四十三年結成以来現在まで

※滝川支部卓球連盟は、前述の滝川卓球連盟が、役員・組織を兼ね、その他活動推進に当たっているものである。

登山 滝川の登山のはじめは、大正十二年七月二十九日、

第一小学校長伊沢豊久を団長として、国兼昇、山内一、谷西次郎、森岡一志及び第一小学校生徒丸本義雄ほか四名、空知太青年団員を加えて十数名がピンネシリ登山をしたことであろう。

その後、芦別岳登山、大雪山登山など、しだいに登山者が多くなったが、戦争で中絶したことは他のスポーツと同じであった。

終戦後、世情も落ちつき登山者も年々増加、昭和三十五年四月三日、滝川高校その他学校職員が中核となって、同好者三十余名で、「滝川山岳研究会」を結成し、登山の技術的研修や、その振興を図ることとなった。

なお、昭和三十五年四月二十四日、明苑中学校で、「滝川山岳連盟」の結成がなされ、滝川市内山岳団体の連絡協議機関とし、滝川山岳研究会、滝川ケルンクラブ、北峯山岳会、滝川高校山岳部並びに同地理研究部の四団体が加盟、組織された。

滝川山岳連盟は、滝川市体育協会に加盟し、市内山岳加盟会員に正しい登山の啓蒙、山岳遭難事故防止、登山技術の研修などを目的とし、昭和三十六年四月に北海道山岳連盟正式加盟が決定した。

昭和三十六年六月二十四、五日雨竜沼暑寒別岳周辺で開催された第一六回国体山岳部門北海道予選会の総務を担当、宿舍の斡旋、受付、その他に当たり、その後、国体山岳部門北海道予選会、全日本登山体育大会北海道予選会、立山登山大集会などに数多く参加し、第一九、二四、二八回国体山岳部門の北海道代表に一名づつ派遣、また全日本登山体育大会にも数名の北海道代表を派遣した。

当連盟が結成当初より考えていた滝川市民登山会は、昭和三十九年六月、滝川山岳連盟がピンネシリに指導標識板（一〇〇メートル間隔に設置）を取付け終了、十月四日ピンネシリにおいて第一回滝川市民登山会を開催、総員一三〇名の参加で、活発な動きが始まり、その後、近郊の山々を対象に日帰り登山と一泊二日の登山等を実施、現在一五回を重ね、益々盛況のうちに無事終了している。

歴代会長

初代 山内 一 昭和三年
元年 二代 三浦 光正 昭和元年
五年（現在）
会員八五名

なお、公認指導員として登山指導に当たっているのは次のとおりである。

一種指導員 中村正俊 二種指導員 山岸敏光、富田勲、三和裕信
地区指導員 渡辺一弘、日景晴美、真鍋麗子

滝川ケルンクラブは、登山技術の練磨と後輩の指導普及並びに遭難の際、会員による救助隊の派遣を目的として、昭和三十三年十月十四日結成をみたもので発足時の会員は一名であった。

翌三十四年、滝川市役所職員五名が十勝岳遭難時には、救助隊を編成して協力し、市長及び市議会から表彰を受けた。

その後、冬季には一般市民対象にスキューバスを運行したり、夏季は市教委と共催で市民登山会を行い、滝川周辺の山、道央の山々を市民に紹介、現在まで一五回登山を行った。

昭和四十四年十月十四日、十周年を記念し、名称を「滝川山岳会」と改めた。会長 成田芳雄、現在会員四三名（男二八・女二五）

相 撲 相撲は日本の国技として古くから盛んに行われた

もので当市でも早く屯田兵時代から祭典行事として取入れられ、毎年春秋祭典の際に行われてきた。

滝川町が交通の要衝として市街も相当発達し、近接町村も大いに開け、戸数も増加をみるようになり、東京相撲の地方巡業に際し、これを誘致して興業したのは、大正の初めて畑中末次郎が二七、八歳の時、勘進元として奔走した。

畑中は明治三十八年一八歳の若さで滝川に移住、南外吉の回漕業その他で働き、その身長は大きくなかったが体力があり「紅葉山」のしこ名をもって宮相撲をとって歩き、大正十二年大日本相撲協会初代高砂親方（栃木山）から地方相撲世話役を免許された。

その後、横綱鳳、栃木山、大錦、玉錦、男女川、武蔵山、吉葉山等の地方巡業の際は勘進元とし多年尽力し、斯道の興隆に一生をささげ、昭和三十三年九月二十九日七一歳で長逝した。滝川が相撲道で久しく覇を唱えたのは彼の努力によるものが多いといつてよい。

昭和十年ごろから青年学校生徒を中心とした空知青年相撲大会が開催されたが、滝川代表鈴木光男、福本博臣、岡部芳夫などが大いに活躍した。

また、東京明治神宮外苑で開催された国民錬成大会に福泉（福本博臣）が昭和十六年、七年と二回、滝光（鈴木光男）が昭和十八年道代表の一人として活躍した。なお、福本は昭和十六年の第一二回明治神宮国民体育大会で個人優勝の栄誉を果たしている。

昭和十六、七年滝川人石の創業期で盛んなころには、工員中には北陵山、駒木山、一の里（二代目・長内正太郎）、樺戸岩（山崎彦正）、豊

の花らがいてその名を馳せていた。

終戦後まもなく、入川悦男らが奔走、人石相撲部をつくり、昭和二十一年八月十五日人石土俵場で、一の里、樺戸岩の出世相撲を行い、全道から一〇〇名に及ぶ素人相撲も参集して盛会であった。

翌二十二年には、日通にいた福桜（福本寛二）、福泉（福本博臣）兄弟、滝光（鈴木光男）の出世相撲、二十四年には、峰の花（岡部芳夫）の出世相撲を行い、滝川の素人相撲界は全道に名をなし、A級で活躍、全道でも優勝、玄人相撲にもひけをとらない強さであった。そのメンバーは山崎、福本兄弟、岡部、鈴木、尾形らである。この中からその後東庄に勤めるようになった山崎、福本兄弟、岡部らによって、砂川東庄相撲部は一層充実発展、全道はもちろん、全国に名をなし、しかも三チーム出場の活況を示すに至り、優勝を重ね黄金時代をつくり、東庄相撲部の活躍は有名であった。

滝川化学の操業が停止となったところから、滝川の相撲も停滞気味となり、春・秋の祭典に奉納相撲が行われる程度であったが、商店街の尽力による大会などによって盛りかえしていた。

そのころでは滝川駅の相撲部が、一時大きな活躍を示していたといわれている。

東京相撲に名を列ねている者は少なく、昭和三十五年ごろ幕下に滝葉山（多田春雄・東五丁目出身）がいた。

昭和三十一年、岡部一男、東金次郎、山下菊太郎、岩本正義、藪内詰夫ら滝川商工会議所を中心とした面々が相談し、東京大相撲準場所を招致して滝川町の名を知らせたが、その後、休止状態にあ

る。

相撲連盟をつくってとの声も出、滝川相撲再現を希っている。

江部乙相撲 明治二十七年屯田入植のころから、江部乙神社の祭典を中心に行われ、奉納相撲は屯田兵村の楽しみの一つであった。

江部乙村西一四丁目に入植した屯田兵、川村儀蔵の父文蔵は、元東京大相撲幕下で指呼名を「緑島」とよび入植当時まだチョン鬚を結っていた。川村文蔵は江部乙全村の屯田兵や若者たちに相撲を熱心に指導した江部乙の相撲普及の元祖で、指導を受けた中島辰五郎、森田亀太郎、佐々木徳松の三力士が土俵の人気を集めていた。

もう一人、屯田兵田中栄松の父彦八郎は「若港」という東京大相撲の関取であった。

大正五年九月八日、秋祭奉納相撲を兼ね出世相撲が行われ、沢野辰次郎（福の花）、田中義英（若の藤）の披露相撲で両力士に立派な化粧回しが贈られ、福の花は「大達」、若の藤は「若の浦」と指呼名が改められた。この日は道内各地より有力力士が多数参集し熱戦がくりひろげられ、盛大なものであった。

このころより一般に相撲熱が盛り上がり、相撲ファンも急増し全盛時代へと発展、沢野は相撲技術を教授し、力士の育成に努力、青年たちの間に多数の力士が誕生した。

中でも、田中栄一（若の藤）、角田堅一（隅田川）、田中明（若の森）の三力士が優れ、昭和三年十一月十一日江部乙村開基三十五周年記念行事として、出世相撲を行うことを、村議会で議決した。

式典の当日は近隣有力力士多数を招待、「若の藤」「隅田川」

「若の森」に豪華な化粧回しが贈られ、大盛況であった。

昭和二年から青年団の支部対抗相撲も始まり活気を呈し、暫く続いていた。昭和二十九年秋祭奉納相撲を兼ね「若の浦」「大の花」

「隅田川」「若の藤」「若の森」の五力士引退相撲が行われた。

現在では奉納相撲がある程度で、往年のような姿はみられない。

滝川水泳協会 昭和二十六年ごろ、滝川高校に水泳部があつて、北空知管内でも、かなり良い成績をおさめ、毎年全道大会には十数名を派遣出場していた。

当時、借用の石原製氷所簡易プールも、昭和三十二年には使用できなくなり、市内にはプール皆無となり、必然的に滝高水泳部も消滅した。まして当市には水泳のスポーツ団体もないまま過ぎてきた現況を憂慮し、元高校水泳部長をしていた柳義文と中谷幸司らが、一般市民、子供の体位向上と水泳本来の知識と技術を身につけさせ、少ない水泳人口から指導し、市民皆泳に努めようと滝川高校OBが母体となり、八名で昭和五十一年六月二十四日、滝川水泳協会を結成し発足した。会長柳義文を中心に、昭和五十四年会員九二名（内準会員七〇名）をもつて、その拡充に励んでいる。

活動の概況。市民皆泳を願ひ水泳人口の増大を図るため、その底辺である子ども、婦人層を対象に水泳教室を毎年開催する。滝川水泳教室の開催、七月下旬、三日間、小五、六年二〇〇名。滝川市婦人水泳教室の開催、七月下旬、三日間。滝川市民水泳大会、八月下旬、小・中学生、一般。指導員技術習得研修会。会員親睦遊泳会。他市町村水泳教室開催に対する指導員派遣、指導者 日本水泳連盟第一種指導員 東晴子、同第二種指導員 中谷幸司、岩本義男、野沢豊光、高橋定明、

水泳場（プール）の施設概要

第三章 社会・文化活動

十数年前、滝川第一小にプールが初めて設置されてから、滝川市民プール、開西中プール、江部乙小プール、簡易プールではあるが第三小、東栄小中プールを含め市内には七カ所設置されている。

しかし、いづれも屋外のプールで、七月中旬から八月中旬までの利用しかできず、また、水質問題もあり循環装置を年次取付けている状況である。

滝川にぜひ室内温水プールをとの願いが高まり、早期実現に対し署名運動がなされ、市当局には昭和五十三年十一月二十五日陳情書を提出、待望の室内温水プールの実現約束がなされた。

建設時期については、二、三年後の様子であるが、一日も早く実現し、一年を通して水に親しみ、子供たちが知育・体育の向上をきわめ、市民皆泳の中から数多くの競泳者を生み出したい。

ボクシング 昭和二十二年、庁立滝川中学校教諭玉置三平が、校内にボクシング部をつくりたいと申し出て、職員会議でいろいろと検討の結果容れられ、ボクシング部を設け、玉置教諭自らその指導に当たった。いまだ幼稚なものではあったが、滝川ボクシングの初めである。

昭和二十六年、日本でも一流のプロ選手でピストン堀口らと肩をならべた山崎隼が来町し、一の坂下本町に道場を開き、リンクを設けて希望者の指導を始めてからしだいにこれが認識されるようになって今日の滝川アマチュアボクシング連盟の基礎を築いたものといわれている。

昭和二十六年五月、少覚納、安達正明らによって「滝川ボクシン

「グクラブ」が高等学校生徒及び一般愛好者五〇名ほどで結成され、初代会長に少寛納が推され、以来滝川東、西高等学校ボクシング部（現滝川高等学校、滝川工業高等学校ボクシング部）及び一般愛好者から優秀な選手が輩出して、ますます声価をあげ、今日道内はもとより、全国的に勇名を馳せるに至った。

昭和二十六年、全北海道対全関東対抗試合に道代表選手として、竹田八州、堀宣久、山崎芳春が出場したのを初め、北海道高等学校選手権大会では、昭和三十年代に竹田八州、越沢務、矢島義弘、峯村憲一、武田寿造、宮下邦夫、河村敏夫が、四十年代には浅尾和信、工藤功次、浅田雄喜、大久幸雄、五十年代になって丹野貴史、原田敏光、丹野和彦らが優勝し、全日本高等学校選手権大会に出場した。

特に、昭和四十七年、浅田雄喜は準決勝で具志堅用高（現ジュニアフライ級選手権保持者）を破り決勝戦に進出したが、おしくも優勝をのがした。

また、国民体育大会北海道予選大会において、昭和三十年代には竹田八州、越沢務、矢島義弘、峯村憲一、武田寿造、小森洋三、四十年代になって浅尾和信、浅田雄喜、大久幸雄が優勝し、国民体育大会に出場した。

昭和三十年代の竹田八州、峯村憲一、四十年代の浅田雄喜らは、その後何度も北海道総合選手権大会、国民体育大会北海道予選大会などで優勝し、全日本選手権大会、全国社会選手権大会、国民体育大会に北海道代表選手として出場し、常に上位にランクされ、特に昭和三十三年、峯村憲一は全日本社会人大会で優勝、竹田八州も同

大会で準優勝、昭和四十八年、浅田雄喜は全日本選手権大会で準優勝し、それぞれ輝かしい成績をあげた。

さらに大学に進学した者の中には、昭和三十年代には、越沢務、矢島義弘、昭和四十年代には浅尾和信、浅田雄喜が大学選手権大会、大学リーグ戦などで活躍し優秀な戦績をおさめ、浅尾和信は天才的ボクサーとして卒業後期待されプロに転向したが、不運にも健康を害し、おしまれながら六回戦ボーイで引退した。

指導者日本アマチュアボクシング公認審判員 峯村憲一、久保喜一、佐藤卓

歴代会長

初代 少寛 納 昭和三年

三代 神部 俊郎 昭和五年

二代 佐久間貞江 昭和三年

会員 結成時五〇名 現在五〇名

滝川市ソフトボール協会 昭和四十四年より道民スポーツ大会が

開始され、これに滝川市代表チームを選抜するための主管団体の必要性からと、四十五年滝川市開基八十周年に当たり、市民体育振興のため市技スポーツとし決議され、この振興団体として昭和四十五年五月二十六日に結成された。

最初は、婦人スポーツ振興を意図したため、これに限られていたが、その後、男子の部設立が強く望まれ、昭和五十年より加入を認めることとし、滝川市に在学している者、同じく職場を有するもの、居住する同好者を加入資格とした。

歴代会長

初代 続木 憲治 昭和四年

二代 田中 正雄 昭和七年

現会員の状況 小学校女子六チーム、中学校女子三チーム、一般男子八チーム

者が集まり、手造りのカヌーをもって各地の河川、湖などで盛んに講習会、試乗会を重ねつつ会員増を図っていった。

この講習会等の指導者は、空知カヌークラブ（現滝川クラブ）が主体となって活躍したのである。その結果、札幌、旭川、苫小牧、小樽、富良野にそれぞれカヌークラブが誕生していったのである。

空知カヌークラブは、岩見沢、砂川、滝川、赤平からなる会員によるものであったが、昭和四十八年独立して滝川カヌークラブを結成した。現在、滝川カヌークラブには一二艇のカヌーがあり、シーズン中には、それぞれカヌーを車に乗せては道内のいろいろな河川湖などにかけ、会員相互の親睦と技術を磨き、毎年開かれる七月の全道ワイルドウォーター選手権、八月のスラローム大会には、全員揃って参加し、それぞれ常に上位入賞を果たしてきている。

また、初心者や興味をもっている人のために、講習会や試乗会を重ねつつ水の上のスポーツの健全な楽しみ方を広めている。

市内末広電気㈱には北海道カヌー協会事務局があり、その運営についても当カヌークラブの会員が多くの任に当たり、その中核となつて活躍しており、市内一の坂町滝川スポーツ内に滝川カヌークラブの事務局があり、今後ますます活躍するものと期待されている。

ただ、カヌークラブのなやみの一つは、若者の地方流出で、最初二三名いた会員も今では一二名といった状態で、一般同好者の入会を強く望んでいるのが現況である。

会長 梅沢秀明

滝川クレール射撃協会 昭和の初期久保正幹（栄町三丁目四）が、当

時小樽、札幌の安全な河川敷地又は原野で、手動式クレール放出機をもって射撃の練習をし、大会などにも参加していたが、大変射撃に熱意をもっていた斉藤貴（栄町サイトー看板店）が若手ハンターなどに相談されたのが始まりで、久保は後継者養成のため所有していた手動式クレール放出機二台を寄贈、昭和三十五年九月二日付で新十津川字上徳富七番地に射撃場の認可があり、滝川射撃倶楽部が誕生、久保正幹が初代会長となり、同年十月北海道射撃協会に加盟した。

昭和三十七年十月、第一七回国民体育大会（岡山市）に北海道代表トランプ選手として内田正信（明神町）が参加したのは、久保会長指導のもとに技倆の向上錬磨の成果からである。

昭和三十九年八月二十六日付にて、射場を砂川市空知太五〇六一に移転認可を受け、横野徳雄所有地面積二九、七五四平方メートルを一〇年契約で借用、北村正男や滝川市長の尽力により射撃場整地工事の援助を得て完成した。北村正男、二代会長となる。

なお、五月より十月までの毎週日曜に営業するほか、年八回から一〇回程度の大会を開いた。

そのころは、道内には二、三カ所程度しか射撃場もなく、全道からの射手により競技が行われ、場所が滝川公園の上なので、日曜日には、公園からの見物客で賑わった。

昭和四十四年三月二十六日付で、増井良男三代会長となる。同四十六年四月、射場付近にファミリールランド及びホテル京都が建設されたことや散歩道路ができたことなどで、指定射撃場の保安基準の維持が困難となってきたので、滝川吉岡市長、浦臼吉成町長の配慮

により昭和四十七年六月二十八日付北海道公安委員会長認可を受け浦臼町五八九番地の一に射場を移転した。

広大な敷地と諸施設完備され立地条件にも恵まれ、釧路、北見、旭川、札幌、小樽方面の利用者を吸収、射撃競技の健全なる普及発展を図り、年々利用者もふえている。

昭和五十年一月三十一日、滝川射撃倶楽部を「滝川クレー射撃協会」と改称、同年三月一日、日本クレー射撃連盟に加入、当協会より理事として、佐藤吉兼を選任する。

現在までに、北海道体育祭クレー大会を北海道一円を対象として開催、昭和五十一年八月参加者六〇名、五十三年八月参加者四三名五十四年九月参加者四五名のほか、滝川クレー射撃協会大会などが毎年数回開かれてきた。

なお、射撃場開場日時は、無休で四月八日から十一月三十日まで日曜祭日は八時から一八時まで、平日は一三時から一八時までとなっている。

滝川弓道会 昭和五年滝川鉄道クラブ機関庫の同好の士が中心で弓道興隆期に初めて弓の手ほどきを受けたのは山本庵であった。

弓道場は三浦華園の園内にあり、射場は段階式の一〇席になった立派なもので、当時大平派家元大平射仏範士が年四回程度来滝し、長い時は一週間ぐらい山本宅に滞在し指導に当たられた。当時の会員には、山本庵、小角六三郎、橋本倉蔵、横山巖雄、兼子定雄、石川栄市、田中賢太郎、木原徳一、浦部全夫、新庄司、木村喜久雄、清水豊吉、及川孝一、横山秀雄、岡部契、橋本政雄、米山三郎など

であった。

また、各地の射会にも遠征したが、岩見沢は北の鉄道グラウンドに射場があり、深川は仲町のウロコ団子工場横に道場があり、下富良野は駅うらグラウンド西側に野立射場、旭川の鉄道クラブに弓道場があったのが思い浮かぶ。

昭和十四年三月、当時願成寺境内で滝川弓道会が練習、同十五年滝川高女で弓道場建設着工している。また、神社南側にも射場が設けられ練習していたが、戦争に突入以来中絶した。

昭和二十二年、竹井己之助、高畑宜雄などによって再建され、竹井己之助が会長となり、同好の士三十余名により、射場を願成寺境内に設けたが、三年で滝川神社境内に移設し、会長に岩本正義を推したが、その後暫し停滞していた。

昭和三十九年、滝川弓道会再建の話が出て、西小学校裏の空き地を市より借用、旧東栄小学校の古材を譲り受け、九月に道場開きを行い、翌四十年秋には披露射会を行った。

昭和四十一年七月、第三小屋体を利用して昇段審査会を開き、空知管内各地から参集、滝川市にも多数の授段者があった。

その後、真言寺境内に弓場仮設、三浦華園裏を借用し一時弓場を設けたり、神社境内にあちちを作って練習と祭典奉納を続けた。

昭和四十九年秋、西小学校体育館建設に伴い撤去問題がおこり西町福祉会館横の空き地に、あちちを江部乙北辰中旧材により設置したが、その後放置のままになっているようだ。

昭和五十一年五月、滝川市二の坂町一一九番地の一に、敷地面積

札幌、ラヴァン、フェニックス、石黒印章印刷、ヴァファイーズ、石坂自工、トランザム、道央建設、道央キラーズ、北星交通、ヤスダ理容院、ハッピースターズ、札幌トヨペット、滝西クラブ、北酒連、ガッツクラブ、札幌トヨタ自動車、一中ファイターズ、郷商事、滝川自動車運輸、上田生コン、上田コンクリート、札幌スバル、アタックスリー三中、ファイヤーズ、三星ドライバーズ、土現ドルフィンズ、不二建材工業、リビングナカジマ、不二建設、空知マックロード、商工会議所、北江カエローズ、スエヒロコックス、札幌フードセンター、塩尻時計店、サクラ商会、真鍋薬品、菱友、第一興産、斉藤テップンズ、岡部商店B、滝川税務署、滝川郵便局、ほくさん、ミクニバイレーツ、ボンバーズ二中、ふじ交通、市役所メッツ、第一エンゼルス、トーキョー、北電フラッシュャーズ、④金市館、北晃自動車、増田電気、ダークホース、ワールドウィンズ、テナタクルズ、マスタックス、レッドソックス、中田エンジニアーズ、中川スコッパーズ、今野商事、米倉商事、ゴールデンボール、全通滝川、滝川税理士会、フジカラーベイソーズ、広小路印刷

審判員 尾崎清、川崎四郎、矢口吉昭、菅野正義、宮田謙也、佐藤清治、小野寿美男、田村恭邦、居林勲、松川潔、得能愉、浦崎幸二、鈴木清、中谷政勝、但田知信、斉藤政行、谷西攻、北村敏光、中枝頼司、近野政幸、立島一徳、吉田八郎、湯沢邦男、高橋正躬、門清治、小林則之、紅露英之、松井雅明

・全道朝野球大会結成と経過

昭和四十五年九月二十日、滝川市開基八十周年記念協賛事業に、滝川朝野球連盟が、旭川、札幌、小樽市の朝野球優勝チームを招き親睦野球大会を開催した。

この大会が動機となり、昭和四十六年に全道朝野球連盟が結成され、第一回全道朝野球大会が小樽朝野球連盟主管のもと開催され、滝川市からも代表チームが参加した。

第一回大会	小樽市	代表チーム	北酒連滝川
第二回大会	滝川市	〃	クラブビクトリー
第三回大会	余市町	〃	中央バス

第三章 社会・文化活動

第四回大会	小樽市	代表チーム	中央バス
第五回大会	北見市	〃	中央バス
第六回大会	札幌市	〃	末広屋電気
第七回大会	滝川市	〃	末広屋電気、滝川市農協
第八回大会	余市町	〃	中央バス
第九回大会	栗山町	〃	岡部商店

全日本銃剣道連盟滝川支部 銃剣道はいまでもなく、大戦中はその呼称も銃剣術とよばれ、白兵戦時における唯一の護身用術として、盛んに普及発達していた。

もちろん、護身術のみならず士気を鼓舞し、心身の鍛練にも非常に有効なものであった。

しかし、敗戦という現実はその時のB二九と竹槍ということ、戦後の日本では人々から揶揄的な言葉でみられ、なかなか普及するに至らなかった。

戦後、各武道界の発達にも伴い、旧軍人を中心とする人々の間から、この復興が徐々にはあったが提唱されてきた。

昭和二十九年ごろになって自衛隊でも、これが採り入れられ盛んになり、発展をみるようになった。

当時は、旧軍隊と違って短木銃を使用することが多かったが、武道としての価値感から、また近代スポーツ「銃剣道」とし、広く国民に普及され、現在は長木銃に統一された。

北海道の各地でも、昭和三十四年一月旭川地方支部の発足を契機に連盟の結成を見るようになり、当滝川においては、旧軍の人々と自衛隊の一部高段者の間で、滝川支部創設の気運が高まり、関係者

の努力が実を結び、昭和三十五年十一月一日念願の全日本銃剣道連盟滝川支部が発足するに至った。

初代会長には、昭和三十五年に会員の互選により神部俊郎を擁立し、以来今日（昭和五十四年）に及んでいる。

なお、創設時の会員数は、自衛官約四百名、一般一六二名で、現在は自衛官約九百名、一般四〇名で、駐とん地内における連盟の指導者は、大塚亨、田口昭雄、山下小吉、本多輝夫、鮫島清香の各教士七段、廻和夫、前田宣雄、山中早苗の各練士六段と成松幸人、中平隆三、島津忠三の各練士五段で、自衛官以外の指導者は田中栄一、増田岩夫、少覚納、越沢三郎である。

毎年四月、日本武道館で開催される全日本銃剣道選手権大会及び九月に予定される北海道選手権大会を目標に、選手達は年間を通じて練習に励み努力している。

特に、全日本大会では、過去二回の準優勝、六回の第三位入賞、また、北海道選手権大会では、三回の準優勝、三回の第三位入賞の栄を獲得した。

スケート 昭和二十四年、空知スポーツ社草浦正己及び佐藤敏郎らが相談し、児童公園にスケートリンクを計画し、滝川消防署のポンプ車出動を請い、水撒きリンクを作ったのが始めである。

昭和二十五年二月十八日、高畑運動具店高畑良助の奔走により、滝川スケート連盟が結成され、冬季間のスポーツとしてスケートの普及振興を推進した（会長神部俊郎）。

その後、児童公園に小規模なスケートリンクを造り、愛好者を喜

ばせ年々その数を増し、昭和三十五年市でもこれに力を注ぎ、一五万円の助成をなし、周一五〇メートル、スピードコート三〇メートル、幅一五〇メートルのフィギュアコートを設定し、照明設備などを完備して、十二月二十九日リンク開きを行った。

また、この年「雪まつり」を開催し、「横綱土俵入り」、「竜宮城」、「滝川大仏」など自衛隊員によって造られ、見るものをして感嘆させた。

なおこの期間中、元全日本選手権保持者有坂選手の親子スケートの美技が、一、五〇〇人の観衆を魅了した。

リンク開き以来、昼間は小中学生、夜間は大人が利用、中には他町村から来てすべるものもあり、二月末までに子ども一万五、〇〇〇人、大人五、〇〇〇人という盛況であった。

でも、スケート人口の増、スピードアップも出てきて、周一五〇メートルのリンクでは短く、また児童公園ではせまくなってきた。

昭和四十四年の連盟総会で、神部俊郎、武田勝夫、高畑良助、塚塚豊ら相談の結果、市でどこかに新しく設置を願い、用具などいっさいを寄贈した。

その後、旧野球場で一年、四十七年から三、四年開西中学校でやっていたが、場所などの関係から、これを変更して第一小学校グラウンドに一周二五〇メートルのスケートリンクを設定し、用具などの購入もなされ現在に至っている。

小中学生・一般に無料開放しており、フィギュアコートも設置

し、子どもにもすすめている。期間は十二月末から二月中旬ごろまでである。

スケート人口も一人ぐらいと思われるが、維持管理の上からの人権費などで困難もあり、スケート連盟もないままの現況でありながらも、経塚豊らの尽力により継続され、二月中旬にはスケート教室を開き後継者の育成、技術向上に努めている。

スキー 昭和九年、スポーツを愛好する寒河江巧は、滝川スキー会をつくり、推されてその会長となり、町民の健康増進に努めた。昭和十九年同会は滝川スキー連盟と改称し、寒河江は昭和二十三年まで会長の職にあった。

昭和五年一月、高畑運動具店主催で第一回スキー大会が石山スロープで開催され、スキー同好者の技術向上並びに振興を図っていた。昭和十年には空知スキー連盟を結成、滝川を中心として岩見沢、砂川、歌志内方面から選手の参加を得て「空知スキー大会」を開催していたが戦争のため中断した。

人造石油（株）が設立されてスキー部が生まれ、名ジャンパー浅木文雄らが中心となって、駄馬の沢スキー場で、長距離、飛躍、耐久レース等の競技が行われた。

戦後人石は滝川化学に変わりヒュッテを建て、駄馬の沢炭坑の石炭を燃やして暖を採る等物資不足にめげず、スキーヤーの楽しい憩いの場となっていた。

昭和二十三年十月十五日、空知スポーツ社草浦正己らの奔走により、滝川スキー連盟を改組し、滝川市民を対象とした市民スキー大

会を開くことになった（初代会長寒河江巧、理事長草浦正己）。

第一回町民スキー大会は駄馬の沢や女学校スロープで、各職場の同好者がチームを編成技を競ったり学校対抗競技が行われた。

その後、長年親しまれてきたスキー場は植林され、木の芽を傷める、りんご園が荒される等の苦情が出て移転を余儀なくされた。

周辺を物色したが思わしい場所がなく、民地（高橋）を借り、自衛隊員の協力、市のブルトナーによる整地により格好のスキー場を作り、その後市が用地を買収して、滝川スキー場とした。

昭和三十四年石山山麓にブロック造り、モルタル塗三〇坪のヒュッテを建設、スキーヤーに多大の便宜を与えた。

滝川市民スキー大会は例年二月中、下旬に開催、五十五年二月には第三一回をむかえ、役員バス、児童、生徒の無料バスなどの便宜も図られ、市も力を入れスポーツ行事としては最も長く続いている。

また、技術向上のためスキー講習並びにバッジテストは各三回、児童、女性、初心者、中級者、夜間の各スキー教室やスキー学校などを開設、六〇名に及ぶ公認技術員、指導員、準指導員、競技運営、技術指導員が協力してこれらを運営し、毎年大きな成果をあげ、道民スポーツスキーには例年参加し、優秀な成績を収めている。

滝川スキー場、北電スキー場、自衛隊スキー場など、初心者として適度な斜度と高度があり愛好されているが、多くのスキーヤーの熱望と指導員などの調査を経て丸加山東方の四七七高地を近代的スキー場として建設されるよう、滝川スキー連盟、財団法人滝川市体育協会が連署し、市、教育委員会、議会に陳情、その実現のため鋭意努

力中である。

歴代会長

寒河江巧、坂田弘治、新谷政治、草浦正己

「雪の祭典」滝川市民冬まつり 冬の生活の知恵として創造する、冬の行事や催しも、夢と希望を与えるものであり、北国の人にしかない喜びや感動を育てることを大切にしなければならぬ。

この計画には交通安全運動を中心とした市民の親睦団体が開催を企画、各団体に働きかけ、滝川市をはじめ商工業、労働、農業、それにボランティアクラブなども参画、冬まつり実行委員会委員長男沢謙三を設立、第一回滝川市民冬まつりを開くことになり、昭和五十三年二月十日から十二日まで、郷土館横の市民広場を会場とし自衛隊の大雪像をはじめ、市内各団体、商店会等による雪像その数一



冬まつり(昭和55.2.9~11)

五像程度に、市民はじめ近郊のものは感嘆し喜びの目を輝かした。

第二回の冬まつりは、大小二〇基以上の氷雪像が所せましと立ち並び、二月十日から十二日までに訪れた七万人の見物客、「来年はグループで雪像づくりに参加しよう」との声も出ていた。

大雪像の前で記念写真をとる親子づれ、雪の滑り台で歓声をあげるチビっ子たち、会場は人の波で

大盛況であった。

第三回市民冬まつりは、二月九日から十一日まで開かれたが、積極的市民参加で年々盛大になり、すっかり雪と親しむ一大行事として定着してきた。

今年は、沖繩名護の交歓児童の来滝もあって初めてみる雪の祭典に大はしゃぎで、ドラえもんなど一九基の雪像の中で歓声をあげていた。

また、松尾ジンギスカン駐車場前には五基の氷像が設けられ、一層華やかさを添え訪れた市民の目を楽しませ、約五万人の人数があり、ボランティアクラブの「まごころ売店」も好評であった。

自転車(江部乙輪友会)

昭和の初期には住民みんなが集まって楽しむような催しがほとんどなかった。

当時、江部乙村には、石橋、山本、坂本、安井という四軒の自転車店があり、この店主達が話し合い、自転車競技を開催しようということになり、昭和四年六月、有志を募り協議の結果「江部乙輪友会」を結成した。

この会の目的は、スポーツを通して青少年の体位向上と健全なる精神の育成で、行事としては自転車競技大会の開催及び一般参加の自転車遠乗り会の実施が主なるものであった。

当時の役員は、顧問に村長大崎栄吉、会長前田梅次郎、副会長河上幸寿、石橋武が選出され、その他役員は市街地区、部落地区から選出され、全村組織としての発足であった。

同年八月十六日、第一回全道自転車競技大会を北辰小学校グラウンドで開催することになり、北海タイムス（現北海道新聞）、小樽新聞、旭川新聞の各紙上に報道されるや全道各地から選手が馳せ参じた。当時、全道的に名の知られた選手は、函館市船岡、浜谷、江別町白川、水野、滝川町会田、松本、遠田、士別町黒田、羽幌町山下、帯広市木村、栗山町伊藤、比布村佐藤、茂尻の湯浅などが有名であったが、この選手達が全員参加したのである。

地元江部乙からは、竹中清一、道川利次、鎌田馨、高畑義雄、星野某、岡村秀雄、坂本某、大矢義教、石黒光成など選手を合わせて総員四五名の選手参加であった。

この費用は、全村寄付金を募集、一戸当たり五〇銭から一円の拠出があり、その他有志の特志寄付など合わせて一五〇円くらいで、これで競技の賞品、外来選手の旅費、昼食代一切のまかないに充てたのである。

大会は第一回の開催とあって、近隣各地から選手の応援や観衆が来村し、地元民など一、五〇〇人を超える熱狂ぶり、あの広いグラウンドを二重三重に取り巻く人垣ができ大盛會を極めた。

大会は花火を合図に前田会長の挨拶、山崎審判長の注意などがあり、競技は一流、二流、三流と各選手の技量に応じて区分され進行された。

不幸にも競技途中より俄かに雨が降り出し、グラウンドは泥沼と化し、選手は次々転倒、体も自転車もどろんこになったが、これにもめげず最後まで競技は続行され、観衆は一人も去ろうとせず、地元

選手に力いっぱいの声援をおくっていた。

その後、大会は何回か開かれたが、そのたびに村民挙げて絶大な協力と熱援があり盛況であった。

また、地元選手は、帯広市、旭川市、羽幌町、奈井江村、赤平村、島松村、比布村その他各地で開催の自転車競技大会に遠征し、道川、石黒、鎌田、坂本、竹中の各選手は入賞の栄冠を得、江部乙の名声は高く評価されていた。

競技用の自転車は、木製のリュウムに細いタイヤで、二七寸の踏切り式特別製のもので、非常に軽いものであった。帯広の木村選手は全道どこの大会に参加するにも、この自転車で夜を通し山越えして出場していたことである。

その他多くの選手たちは近隣町村の競技大会には、自分の愛用の自転車で往復し、汽車に乗ることは、ほとんどなかった。

これという楽しみのなかったこの時代の自転車競技は、地域のレクリエーションとし大衆から歓迎され、楽しまれていた。

全空知剣道連盟

昭和二十四年、北海道剣道会の最高権威であった本間治助範士（当時教士）が滝川町に移り住むようになり、剣道愛好の士は期せずして本間範士の下に集まり稽古が始められ、これが戦後における剣道の発展及び全空知剣道連盟結成への大きな原動力ともなったのである。

翌昭和二十五年、滝川剣道同好会に加えて、芦別、赤平、茂尻、新十津川の同好者と共に「北空知剣道倶楽部」が結成され、二十六年「北空知剣道連盟」と改称した。

昭和二十七年に至り、逐次深川、妹背牛、歌志内、上砂川、砂川等を傘下におさめ、剣道復活の勢は、あたかも燎原の火のようになり二十八年六月十四日、戦後第一回空知剣道大会を、滝川明苑中学校体育館で開催したが、参加団体実に四二チームを数え、全く予期以上の大成果をあげたのである。

これに自信を得、北空知剣道連盟は広く檄をとばし、遂に空知全域を加盟させ、昭和二十八年八月二十九日「全空知剣道連盟」を結成するに至ったのである。

加盟の市町村は次の九市一四町で、現在六三〇名の会員を有する。

滝川、岩見沢、深川、砂川、赤平、芦別、美唄、三笠、新十津川、上砂川、奈井江、栗沢、栗山、長沼、月形、浦臼、妹背牛、沼田、北竜、幌加内、雨竜、秩父別

歴代会長

初代	本間 治助 (滝川)	昭和六・八	二代	森 正年 (岩見沢)	昭和四・七
三代	島田 薫 (新十津川)	昭和四・三	四代	岩井 範光	昭和五・三
五代	少覚 納 (滝川)	昭和五・四			

今や、全空知剣道連盟の名は全道に響きわたり、文字どおり、「北海道剣道連盟」発展への大きな推進力となっている。

特筆される事業としては、昭和二十八年以来、毎年全空知剣道大会、全空知少年剣道大会を実施し、二七回をむかえた。

空知柔道連盟

昭和二十四年、江部乙の手嶋圭二郎六段、滝川警察署中川得三郎次席とともに、空知柔道連盟の結成を図り、深川、砂川をはじめ、上砂川、歌志内、赤平、芦別などの炭鉱地帯にも柔道の

振興発展を働きかけ、昭和二十五年三月一日に設立、初代会長に田中君太郎、理事長手嶋圭二郎、事務局長中川得三郎をもって発足、第一回の大会を二十六年六月、妹背牛で開催、以後毎年大会を開催今日に及んでいる。なお、空知柔道連盟の正式呼称は昭和二十七年で、昭和二十九年全日本柔道連盟より公認、当理事長手嶋圭二郎八段は、開設当初より現在まで、また、北海道柔道連盟においても二十五年より今日まで連続し理事に就任している。

加盟市町村は滝川（滝川市、江部乙町を含む）、芦別（芦別市、上芦別、西芦別地区の三井鉱業所を含む）、上砂川（上砂川町）、赤平（赤平市）、砂川（砂川市、奈井江町）、歌志内（歌志内市）、深川（深川市全域）、富良野（富良野市及び沿線地区を含む）、新十津川（新十津川町）の各柔道連盟、沼田、妹背牛、雨竜、秩父別、北竜、幌加内各町の柔道同好会、一五団体、七市九町である。

歴代会長

初代	田中君太郎 (当時滝川警察署長)	昭和五・三
二代	小松三四郎 (北炭空知鉱業所長)	昭和六・三
三代	飯田 清一 (高根鉱業所長)	昭和三・三
四代	転法輪仏海 (三井芦別鉱業所長)	昭和三・三
五代	高山森一郎 (住友赤平鉱副所長)	昭和四・三
六代	坂根 英夫 (三井砂川鉱業所総務課長)	昭和六・三
七代	神部 俊郎 (道議会議員、現会長)	昭和六・三

主なる行事概要として、空知大会年一回、昇段審査会、指導者講

習会各年三回、一般及び中、高学生講習会年五回、全道少年柔道大会、高体連、中体連試合参加、全道都市対抗大会、全道段別選手権大会選手派遣などである。

現在当連盟に登録されている四段以上の高段者は、八段一名、七段一名、六段一〇名、五段四五名、四段四〇名である。

北空知ソフトボール協会 昭和四十一年当時、当地区には高校女子チーム八チームのみで活動。そして、チーム個々が北海道ソフトボール協会に登録している状態であった。

翌四十二年高校チームの増加、一般女子チームの設立、公認審判員の増加などにより、また、道ソフトボール協会の強い指導もあって、ソフトボールの一層の普及発展を目的とし、同年五月一日当協会の設立となった。

加盟の市町は中空知・北空知の奈井江、浦臼、砂川、歌志内、滝川、新十津川、赤平、芦別、妹背牛、深川、幌加内、沼田、秩父別、北竜、雨竜の六市一〇町である。

歴代会長

- | | | | |
|----------|---------|----------|---------|
| 初代 水谷醇一良 | 昭和四二・五三 | 二代 矢野 栄治 | 昭和四三・四四 |
| 三代 統木 憲治 | 昭和四三・四四 | 四代 広井 潔 | 昭和四四・四五 |
| 五代 佐々木 明 | 昭和四四・四五 | 六代 中田 一郎 | 昭和四五・四六 |
| 七代 田中 正雄 | 昭和四五・四六 | 八代 小森 文夫 | 昭和四六・四七 |
- 現在高校女子チーム(奈井江高、砂川北、滝川西、滝川北、赤平西、赤平東、芦別商、妹背牛商、深川東、沼田、秩父別)
公認審判員一種(一名)二種(二四名)三種(一四三名)

第三章 社会・文化活動

中空知軟式庭球連盟

滝川市を中心として近隣市町におけるテニス愛好者がふえ始め、北海道連盟大会参加を目的とし、昭和四十八年三月各市町愛好者代表に呼びかけ、発会の準備を進め、同年四月一日設立され発会式を行う(会長 武田勝夫 昭和四八・四九・五四現在)。

なお、昭和五十四年までは深川方面各市町も含めていたが、テニス人口増により、深川連盟として独立、中空知連盟より脱会した。加盟市町は、滝川、砂川、奈井江、歌志内、新十津川、浦臼、赤平、芦別、上砂川の五市四町である。

北空知体操連盟

高体連北空知管内(奈井江町、砂川市、歌志内市、上砂川町、芦別市、赤平市、滝川市、新十津川町、深川市、妹背牛町、沼田町、雨竜町、秩父別町、幌加内町)二四高校のうち、体操競技実施校が一二校となり、さらに組織化による発展、普及を考え、さらに第五回全道選手権大会当番ということから、昭和四十一年四月十日に設立したのである。

歴代会長

- | | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| 初代 岩本正義 | 昭和四四年度 | 二代 矢島亀鶴 | 昭和四五年度 |
| | 四四年度 | | 現在 |
- 滝川バドミントン協会** 昭和四十年ごろ、滝川市役所バドミントン部が中心となり、活動が活発となり、空知大会で一般男子シングルス山田健治二年連続優勝、一般男子ダブルス白水範哲、山田健治組三年連続優勝、一般女子シングルス前田静枝、一般女子ダブルス前田静枝、柳美奈子組、混合ダブルス山田健治、前田静枝組、及び白水範哲、柳美奈子組優勝の好成績をあげた。
- 昭和四十二年、全道市役所大会が開催され、これがはずみとなつ

て昭和四十三年草浦正己を会長とし、山田鶴治、白水範哲、井上昭、月館修三、屋敷悟、近藤博が中心になり、北空知地区全体を包括した形で、北海道バドミントン協会に正式登録し、再出発をした。

その後、体育センターの建設などもあり、一般のバドミントン人口も急増、また、江陵中が全道を代表として全国出場、さらに高校もレベルアップされ、全道代表となって全国大会出場、一方近年市内ママさんもバドミントン教室を通じて会員増加、現在市内では一般一〇〇名、ママさん二〇〇名、高校一五〇名、中学生五〇名と、本格的練習をしている数は五〇〇名に達している。

近年、北空知の市町においてもバドミントン協会の設立をみるようになってきたので、滝川市バドミントン協会設立を区分したい。

第四節 文 芸

滝川の俳壇 滝川屯田兵以来の俳人を挙げれば、山形県出身屯田兵の兼古梅堂（嘉市）は開拓当時より頓智がよく、発句や狂歌が上手で、短冊はなかなかの達筆、漢文などすら読み返すなど、奇人として大正のころまで、滝川に異彩を放った人物であった。

また、佐賀県出身屯田兵浦部兎月（金蔵）は、日露の役に従軍した時も句帳を手離さなかったほどの風流人であった。

功もなく いとはづかしや 渡り鳥 兎月（日露戦争凱旋途中の句である。）

兎月は、大正初期に、番外地に出て醬油、せともの店を営むかたわ

ら町役場に勤め、昭和九年から町会議員として二期の議席をもち、青年にも交って句会にたびたび出た。

この他、番外地に新潟出身の近藤越鴨がいて、文字もうまく、また愛鳥家として知られ、後年広小路で余生をおくった。川端蘭芳は岡山の出身、大正初期に来住の染物屋で、俳句は宗匠の位をもっていた。また、運海寺住職杉浦孤島などと、いずれも諧謔と風刺に満ちた、いわゆる談林派的な作風を示していた。

大正から昭和にかけては、峰須賀農場の支配人で、後に雨竜商会社長となり、元老とし滝川の重鎮であった前田瓢々子（久吉）をはじめ、柴崎霞山（表具師）、酒井孤舟（信高）、岩崎月舟（武、恵比寿楼主）、石丸田基雄（滝川神社宮司）、野坂筑仙（直温）、岩見紫川、赤沢秋水（源五郎）、吉田孤城、戸城破竹、成田稻洲、村上斗光、佐藤瑞月、藤井柔水、滑川貞祥、斉藤民友子（欣峰）などが、滝川吟風社あるいは鶏声吟社として、しばしば連座をもっていたが正岡子規以後の客観写生、花鳥風詠とは違った、宗匠俳句の域を脱してはいなかった。

瓢々子、紫川、月舟、秋水は、能筆家であり、また漢詩もよくした。筑前、秋水は小学校の校長退職者、ことに秋水は書家とし、刀剣鑑定の権威者として各地を歴訪していた。紫川は文筆家で新聞を発行したこともあり、滝川で最初に幼稚園を始めた人である。

尾形碧天郎（燦）は医師で停車場通り讃岐屋隣に開業していたが碧天郎の新傾向自由律俳句は、大正十二、三年ごろの滝川俳壇には、驚異的存在で、尾形宅の連座には中川直山（捨三郎）、中川旭、そ

れに月舟、瓢々子、青年俳人林畝山（亀）が出席している。

畝山は後年、瓢々子の女婿となり、雨竜商会の支配人となったが大正七年の処女作「松見えて校舎の遠き霞かな」を小樽新聞俳壇に入選以来俳句を始め、後年数多くの青年を養成している。

また、白山空垂（友正）が、大正十一年第一小学校で教鞭をとり少年俳句を指導した事も忘れられない。

尾形の転出後、昭和元年臼田亜浪の「石楠」牛島藤六の「時雨」青木郭公の「暁雲」などの結社による人たちにより、滝川に木の芽吟社が生まれ、プリント俳誌が出た。高野草雨、北風凍泉、真鍋石楠、菊地華牛、佐久間竹風、林畝山、寺尾晴湖らのメンバーであったが同志の転出などで自然解消した。

高野草雨は駅の助役であったが、滝川を転出後札幌鉄道管理局に勤め「時雨」復刊後の編集者となって手腕を振った。北風凍泉も駅の外勤助役で、後室蘭助役に転出し安平駅長になった。佐久間竹風は、拓銀支店の出納係を随分長い間勤めていた。菊地華牛も駅の助役、真鍋石楠は駅手とし長い間「赤帽さん」で親しまれ、旭川に転出してからは「葦芽」で活躍した。

増沢洗花は、昭和二年ごろ、貨物係として転任してきた。洗花は萩の本宗匠の位を持っており、句風は新しく山田秋雨の「赤壁」に所属していた。

昭和三年に、林畝山、石黒白萩らの奔走で「笹笛吟社」が結成され、道内の「時雨」「暁雲」のほかに、山田秋雨主宰の「赤壁」の会員が新たに加えられ、指導と運営は畝山、洗花が担当し、佐久間

竹風、太田竹寒、相馬冬雨郎、森村華山、石黒白萩、今野草雪、鎌田丘花、平田雅春、津田冬湖、野村冬水、根井清月、藤平白雲、中野紅花、中村耕平、清水石蔦、白石伯石、佐藤紅陽、狩野峰月、桜田啄三らで、多くの会員によって連座がもたれ、昭和十年ごろまで続いた。

昭和五年牛島藤六を迎え、加賀屋旅館で全空知俳句会、同六年には青木郭公を迎え、全空知俳句大会を三浦華園で開催、盛会であった。

昭和七年ごろよりさらに俳人がふえ、佐伯梓、雨宮笠源、壺井青坡、北村雅秋、松尾紅啼、根井冬壺、中村旅人、中浜河道、樋口弥栄女その他数多くの新人がいた。連座の場所も変わって、ある時滝川公園に吟行したり、野外で月見句会なども催した。

時あたかも「時雨」が廃刊になり、新たに長谷部虎杖子主宰の「葦芽」が発刊になり、「暁雲」ともども俳人は挙って投稿し、滝川俳壇の意気は大いにあがり、深川、美唄などの俳壇と交流もまた盛んに行われた。

佐伯梓（寿雄）は、四国松山の生まれだという。材木通りに居をかまえ、一定の職を持たず、頭脳明せきな雄弁家でありながら俳句と囲碁で日を送っていた。

壺井青坡（孝雄）は道銀の出納係で、俳句はユニークな新興作家で、芸術書道（前衛派）を学び、絵は蒼元社の会員で、剣道も有段者といわば万能にすぐれた人で、昭和十八年東京へ転動した。

根井冬壺（清）は道銀支店の出納係を退いてから、町の商工指導

に手腕を振り、後に魚菜市場の社長となった。冬壺は町立病院に句会をもち、戦後は文化協会設立や独歩会設立の発起人となり、町議会議員にも当選、滝川の文化振興に寄与するものが大きかった。

昭和十二年ごろより、冬壺、青坡、白萩らは中央俳壇で起きた新興俳句運動につながりを持つようになり、道内俳誌「葦芽」にも、その欄を設けてそれらの風潮を容れたのが、滝川の作家たちであった。そのため日華事変から太平洋戦争に突入するとともに、中央における特高警察の新興俳句作家の弾圧と、投獄などの関係から、滝川の俳壇もまた沈黙せざるを得なくなった。

昭和二十一年敗戦の虚脱状態から一斉に文芸復興の運動が展開され、印刷用紙の割合潤沢であった本道では、疎開雑誌の名のごとく、中央の有名作家が、みな指導者となって名を連ね、戦前の新興俳句は現代俳句と塗り替えられた。

元「旗艦」の主宰者日野草城指導、土岐錬太郎主宰の「アカシヤ」が隣の新十津川から出生の声を挙げ、その他二〇社（戦前は三社）ほどが結社、百花繚乱のごとく誕生した。

文学に飢えていた滝川の作家たちも今まで繋りのある系統を選び石楠系の新田汀花指導、古田冬草主宰の「緋衣」と「アカシヤ」に集結された。

「緋衣」は戦後いち早く、新田汀花主幹、古田冬草編集として、余市町から発行され、後に札幌から発行され、当時発行部数二、〇〇〇といわれ、本道第一の俳句誌とされ、滝川の作家が多く投句していた。

「緋衣」は昭和三十五年一月廃刊になったが、滝川の作家は二十七年三月号で終わっている。

二十一年から二十四年までは石黒白萩が最も活躍し、川端柳人、宮部鳥巢、遠藤かなふらが良い成績を示し、白萩は巻頭をたびたびとり、常時上位入選、他の滝川作家も上位作品を占める活躍ぶりであった。

しかし、二十七年三月号から、滝川の作家の作品が一人も見られなくなったのはおもしろい現象で、「緋衣」へ投句していた人々は、「緋衣」をやめてどこの俳誌へ動いたか、なぜ「緋衣」をやめたかは明らかではない。

「アカシヤ」は日野草城の門下が全国から集まって華々しいものがあった。土岐錬太郎、八幡城太郎、伊丹三樹彦、石黒白萩が、編集と経営に当り、表紙は鈴木信太郎画伯が描き、岩佐東一郎、小寺正三、森田たまなどの一流作家が毎月寄稿し、「アカシヤ」の抒情精神は北海道にロマンの開花となって深く根をおろした。

滝川からは、川端麟太、佐伯梓、相馬冬雨郎、北村雅秋、遠藤かなふ、窪慰子、西平正子、丹野政子、加藤径雨、永田祐三、長瀬曙人、斉藤春海、菅沼孤雁、松田桐花が参加し、瀬川夜詩夫、大場良介、能代谷陽一、花摘富夫、大橋美佐子などを育成した。

しかし、「アカシヤ」の指向するロマンチズムを物足りないとする梓、冬壺、麟太、雅秋は、プロレタリア・レアリズムを標榜する細谷源二を擁立して、昭和二十二年滝川より「北方俳句人」を発刊し、全国の俳壇を睥睨させたが、二十四年五月経営の拙さから解

散して、翌年砂川から細谷源二主宰の「氷原帯」を出し、滝川に支社を置いた。滝川からは川端麟太のほか深沢伸二、園田夢蒼花、館桑炎、見沢一鬼、宮部鳥巢らの作家が参加した。

戦後、滝川の俳句作家が投句した俳誌の主なものとして、前述のほか「北海道俳句」「はまなす」「あきあじ」などをはじめ、プリント俳誌としての主なものに、昭和二十七年空知独歩会として発行人根井清、編集人川端麟太による文芸誌「空知川」の俳句欄、また戦後若手俳人として活躍した山形健次郎等の投句した「涙痕」がある。

昭和二十六年、日野草城が大阪から「青玄」を、八幡城太郎が東京から「白亜」を、アカシヤの僚誌として発刊した。

したがって、鍊太郎が主宰となり、白萩が副主宰となつて標榜する俳句精神も「死の抒情へ」から、さらに「生活のうたごえ」に変わる。貌していき、吉田えいじ兄弟、岩松このえ、松沢木公、高橋凡人、峰廻文鳥、岩城弘、桜田とし子、浅木笑美子などを加えていった。

また、アカシヤ全道大会も白萩が大会長となり一五回のうち、一回を滝川で開催し、現代俳句は一般文学のジャンルとつねに併行した。モチーフを持たなくてはという意味から、大会のつどアカシヤの客員を招へいした。

寒川光太郎、田中冬二、田辺茂一、福田清人、那須辰造、十和田操、町田トシ子、石塚友二、更科源蔵、白川了照その他数多くの作家が滝川へも来訪し、文学講演の場がもたれた。

現在も「アカシヤ」と「氷原帯」の支部があり、結社意識を超越

して、滝川俳句懇話会ができ、例会をもっている。

俳句界が伝統俳句と前詠俳句に大別されるようになったことは、滝川でも例外ではなく、それぞれの結社によって、その特徴が現われ、それと同じくして新旧交替も自然の摂理によって行われた。

滝川を中心とした俳誌のうち、氷原帯主幹細谷源二は昭和四十五年十月死亡、川端麟太が代表となり、現在は氷原帯滝川支社（社長見沢一鬼）として活動している。

次いで、俳誌アカシヤ主幹土岐鍊太郎が五十二年七月に他界し、その後、岡沢康司が代表となり、俳誌を継続し滝川支社も五十五年一月結成され、現在吉田えいじが支社長となる。

また、俳誌壺は休刊中であつたが、四十八年十月主幹の斉藤玄が芦別市より滝川市に転勤になつたので、これを契機に滝川市で復刊された。

しかし、主幹が五十五年五月死亡、現在金谷信夫、稲島篤木の二名が代表となり、旭川市に発行所を移した。滝川支社は武内夕彦が支社長とし活躍している。

「氷原帯」より

光の雫となり汗の群衆からこぼれる

子の体温移りし尿瓶捧げ持つ

ふるさとのほらわたおどる祭山車

野を拓く父祖の血が濃き紅葉の燃え

青蘆の思慕が明るい青年期

戸袋の冬日に蠅の骨透ける

「アカシヤ」より

月草や一竿風月吾れのもの

川端 麟太

見沢 一鬼

下田 かなぶ

毎原 糖児

木村 信子

今井 たけし

石黒 白萩

病識や十寒の闇八方に

如月やはがねの色に森ふくれ

だるま売りに北国の夏雨ばかり

虫干の衣類箆笥の闇こぼす

おぼろ夜や紙人形に目鼻なき

「滝川文学」より

黄落の木に凭れば木も凭ることし（青女同人）

ほぐれんとして傾ける草芽かな

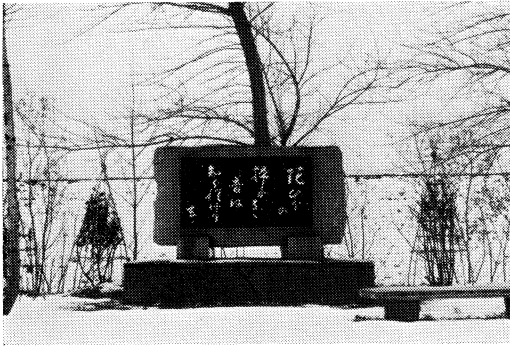
「江戸乙俳句会」（別記）

現在は、各結社による句会ももっているが、それを超越した「滝川俳句作家クラブ」を結成、その例会をもっている。

なお壺主幹の斉藤玄は、昭和五十二年に、文化センター広場に句碑「花びらの掃かるる音は知られけり」を建立、続いて石黒白萩は五十三年滝の川公園に句碑を建立、句集とし「朱塗りの箸」を発刊



石黒白萩の句碑と滝の川公園



斉藤玄の句碑

した。

「壺」より抜萃

冬の日と余生の息とさしちがう

沫雪の白より翔ちて鶴の白

母もそのははも跳でん胡桃割り

支へむとして支へられ寒の道

朝の刃に葱の香足るる小家族

凧の崩さずほし海女の村

どこからも見ゆる一と間の水中花

灯台を点とし強き冬の海

飲食の細るをかくし寒鴉

吉田 えいじ

大橋 美佐子

北村 雅秋

竹田 伊佐昔

今本 政夫

伊藤 千愁

遠藤 三橋子

齊藤 玄

武内 夕彦

宮部 鳥巢

加藤 三枝子

伊佐野 九舎

大辻 克己

小野田 涼子

沼田 鶴代

川本 政代

江戸乙の俳壇 江戸乙の俳句会については、大正十四年ごろす

で「凡々吟社」があり、句会は毎月一回役場の宿直室を会場にし、

屯田兵だった老教師本莊幹一（空華）、役場吏員中村誠（秋江）、兵

事係の石黒啓明、笠松太三男、臼杵北州、佐々木徳雄、農業会技師

玉置元旦、農検の堀川翠舟等が集まって句会が行われた。

凡々吟社とは別に、昭和十一年ごろから榛谷病院長宅で、榛谷一

夢、同かず枝、鎌田薄氷（昌文）、佐藤正敏、高見七郎、前田南花、森

本幹夫等が集まり、ホトトギス派の句会が、なごやかに開かれた。

また、江戸乙俳句会に関係なく作句していた人に、当時郵便局長

代理をしていた早弓房松がいた。

昭和二十年九月、ホトトギス派の江戸乙俳句会（代表榛谷美枝子）

が設立され、毎月句会が行われ、榛谷が三十五年札幌に転住するま

で続いた。

しばらく中止の状態にあった江戸乙俳句会は、昭和三十八年八月

菅原虚洞子の町立病院就職により復活の気運高まり、全町の各派俳

人によびかけて、三十九年九月五日、新しく江部乙俳句会の結成を実現、町文化団体協議会に加盟、毎月一〜二回句会を開き、四十年十月、第一句集「辛夷」を発売、また句会報も発行、しかも、同好者の中にホトトギス、青女、葦芽、はまなす、アカシヤ、氷原帯、自鳴鐘、無所属という、いろいろな結社の人々が集まって句会が続けられ、句集、句会報が積み重ねられてきたことは、文化の華を愛すればこそである。

江部乙俳句会作品より

花じやがの天塩路寸土あます無き
菅原虚洞子
屯田も古りたる村や花林檎
増永 小城
ダム湛う山ひつそりと紅葉燃ゆ
今野すぎ乃
新聞にはさまりて来し吹雪かな
石川 句城
芦吹かれ記憶の中の氷橋
岡本 のぶ
銀漢や草食みうつる牧の牛
増田 曉夢
孫の描く絵も木枯の寒さかな
湯浅 勝治
柳絮とぶ頃かも夫の試歩いまだ
田中ちえの
春光をまともに立てる松葉杖
谷本美佐子
朝露にもぎ惜みをり茄子の艶
加藤美代子
子の縁談決めにゆく日の初袷
葛原 歌子
思ひきり母に供へん牡丹切る
三浦 利治
冬日落つ死する勇氣のつひになし
佐々木美都子
地吹雪の野をゆく命炎やしつつ
横山 守
木の葉髪我が生涯の夢捨てず
榎谷美枝子

滝川の歌壇

滝川開基以来、和歌を読む人はかなりいたと思う

が正岡子規以後の短歌として、中央と連繫をもったものは、大正中期からのようである。

大正八年十一月、小田重幸、奥野峰美、畑中明月、金子照葉の四

名が相談し、手製の謄写版で、短歌誌「あかね」を創刊一〇〇部を印刷し各地の同人誌や知名の歌人に送ったが、貧弱なもので誰も目をつけてはくれず、資金の面で困り、第二号発行の勇氣もなく失望し、畑中、奥野は町を去り、小田、金子は秘かに相談して家の許しもなく、希望を抱いて上京した。

大正十年、事情あって帰郷した金子照葉、小田重幸は、新しい同志泉此恩を得、これまた前後して町に帰ってきた奥野峰美と四名で、「あかね」を改題し「しころ」として、十月第一号を発売、前のこともあって五〇部より印刷しなかった。

滝川では依然として一人の同志も得られなかったが、他から励ましの手紙や原稿も受け、勇氣を出し第二号も順調に発行はしたが、滝川での同志は四名以外に得ることはできないまま、翌年十一月、小田重幸と金子照葉は、再度故郷を捨てて上京した。

大正十二年「アララギ」の島木赤彦に師事して金子照葉(協平)が同人誌「金の鈴」を出し、小田重幸、泉此恩、守谷操一、三浦源一郎、座主謙三等の青年グループが活躍した。

蟬ひとつ鳴きめて山のひそけさよ

木洩れ陽を踏みてゆけば悔なし 金子 照葉

同年九月一日、関東大震災の日、上京していた金子は、家庭の事情で又滝川に帰った。そして再度「しころ」の復刊第一号を出すに至った。そのころ秩父別から吉田迪男が来て、詩歌誌「北線」の歌壇編輯を金子に依頼したので、それを引受け「しころ」を廃刊して、「北線」の歌壇に力を入れ、その翌年金子は第一歌集「育くまれゆく芽」を出した。それは当時定価三〇銭也の小冊子であった。

昭和二年には現代語短歌（口語歌）を提唱する石黒白萩が北見から帰郷し、西出朝風主宰の「今日の歌」の支部として、斎藤正之、柴田宵曲らと滝川純正詩社を創立した。

白萩は「新緑」の鳴海要吉、「カラスキ」の青山霞村、「新短歌時代」の並木凡平にも師事し、各地の文芸雑誌の同人として活躍し、また「赤潮」「独創時代」の同人誌を出し、歌集「地に呻くもの」を刊行した。

金持にだけゆるされた文明か

聞くともなしにラヂオたち聞く

石黒 白萩

当時の現代語短歌（口語歌）の指標は「現代の歌、ほんとうの民衆、民族の詩をうち建て、芸術によって現代の荒涼から救い、芸術によって正義の世界を築きたい。その趣旨から日本民族の伝統の詩である短歌を完全に現代語にしたい。俳句と長詩とを無斬に踏みこじられた韻律から救い、詩歌に出発して一切の芸術の革新に臨み、時に随い社会の各面に進出する」というのであって、随って当時の作歌精神は、新鋭文学に相当刺激された思想の転換期だけであって、プロレタリア・イデオロギーが多分に注入されたことはもちろんで、殊に北海道は伝統の歴史が新しいだけに、新短歌運動がし烈であった。

照葉、源一郎、謙三らが白萩に迎合、その他歌人とし藤本博、藤本鳥羽子、神部東枝が「心の花」に、萩原慶秋が「橄欖」に、柴田宵曲、橋京子が、与謝野晶子主宰の「明星」に、それぞれ活躍していた。

昭和四年、東京純正詩社の「今日の歌」が廃刊になり、新たに金沢純正詩社から「新短歌」が創刊され、昭和四年から十年にいたるまで「新短歌」の支部として、滝川純正詩社は毎月例会を続けた。

当時の世話人は石黒白萩、金子照葉、白井敏三、横田みのる、丸要二郎が当たり、会員約五五名で小島宵柳、春田讓二、後藤白雨、座主謙三、小田正直、石原昇、佐々木英二、高橋勇、町口信治、菊地竜吉、花輪真澄、中田哲州、狩野峰月、荒川冷愁美、中村不二夫、高崎折花子、平田ともゑ、阿座上とき子、佐藤美佐子、平田雅春、高橋きよし、石橋河染、市川白帆、市原露萩、松尾萩村、三浦源一郎、村山露風、土井八千代、山田谷美心、相馬冬雨郎、赤木冬彦、岩田浩郎、藤平四季、種村篤緒、前田睦月、高橋松風、少覚納、西田雅美里、佐藤麗月、坂本杜子造、榊幸直緒、工藤美穂、中川佐逸、前田美枝、増井兎穂、田口敏子、床司登美男、亀田卯太郎、和島玲司、窪田露草子、虎谷二三子、寺前夏屋、井端ふさを、松浦幸子、田家畑也、藤松俊子、定岡三秋、緒木擁、逸見宗一などで、横田みのると青年学校生徒達は、並木凡平主宰の「青空」支部を設けていた。

昭和十年、石黒白萩、金子照葉、白井敬三等の主唱で滝川歌人会が創設され、雑誌「新歌人祭」を発行、中央歌壇からの寄稿も多く新短歌運動に力を入れ貢献したが、逐次戦時体制にあったそのころは思想弾圧が行われるようになり、文芸誌や同人誌に及ぶようになり、次第に衰微して行き、滝川歌人会の活動も下火となった。

しかし、特筆しておきたいことは、滝川歌人会が、昭和十年に文

豪国木田独歩の木碑を空知川畔に建立、郷土出身の樋口賢治がアラギ同人として中央歌壇で活躍、また滝川で教鞭をとって、文学青年を生んだ白山友正が俳句より短歌に転じ「短歌紀元」を発行作歌一筋に打込み、多くの歌人を育成、北海道歌壇に重きをなしていることなどである。

昭和二十一年、福島県人で教壇を退いて明神町に余生を送っていた野坂直温が、勅題松上雪に詠進して入選した。

降りつもる雪をしのぎて若松の みどりの色はかわらざりけり

昭和二十二年四月になり、金沢純正詩社から「新短歌」が復活し石黒白萩、渡辺茂雄が参加、滝高教諭岩城之徳、滝工高教諭斉藤昭二が指導者となり、毎月例会を開いた。

岩城之徳は石川啄木の研究に熱を入れ、函館の宮崎郁雨（啄木の義弟）の協力を得て、石黒白萩が発行する「啄木研究ノート」に労作を発表、一躍中央にみとめられ、岩波書店の「文学」などに発表、啄木研究家として認められるようになった。

昭和二十五年、滝川歌人会は、石黒白萩、金子協平、斉藤正幸、根井清などとはかり市内各界の援助を得て、空知川畔に啄木の歌碑を建立、その碑面の文字は小田観螢の揮毫、その除幕式には小田観螢（啄木同郷の歌人）、西村一平を迎え、記念野外短歌会が盛大に催され、その翌年宮崎郁雨夫婦が滝川を訪れた。

昭和二十七年、文学雑誌「真珠」が発刊され、歌壇も設けられ盛んに投稿があった。

滝川から野島暁、野島知子、金子協平、根井清、吉田武雄、加藤

まさ子、斉藤春水、渡辺恵美、牧野文子、大橋みさ子、斉藤とみ子、東健蔵、山下凡平、真田整一、真田架鶴子、宮田新一等が出している。しかし、この「真珠」も三号で姿を消し、その後目立った働きはみられなかった。

文芸結社の離合集散は常で、その後の歌壇は低調であったが、昭和三十五年、野田牧聖が市教育委員会社会教育主事に赴任以来、社会教育の部面からも、滝川の短歌人口のことを考え、高校の斉藤昭二、田中茂八（難波繁太郎）らとはかり、市民短歌会を設立、月例短歌会を開催広く新人の育成にも努力の結果、しだいに歌壇復興の機運が高まり、滝川短歌会が誕生し、同年十二月機関誌「滝川短歌」が創刊された。

なお、この以前昭和三十二年、斉藤昭二が御題「灯」に詠進してみごと入選、宮中歌会始めに参列した。

ノサップのガスこめし海におぼおぼと

灯のまわる見ゆ千鳥よ恋し

斉藤 昭二

昭和三十七年一月、滝川短歌会は結成一年を記念して、第一合同歌集「雪虫」を滝川文化協会から出版した。出詠者は五三名であった。

その後、赤平市にいた「砂金」渡辺於兎男主宰同人金坂吉晃が滝川に移住、「新壘」同人岡山去風が、滝川第一生命支部長として来住、新十津川役場退職の藤森蝶二が滝川に移住、毎年行われる文化祭に短歌部門が設けられた。また、この年野田牧聖、田中茂八、真田整一、金坂吉晃、岡山去風、金子協平、藤森蝶二の七名で滝川歌

人クラブを設けた。

昭和三十六年四月、滝川短歌会の代表者であった齊藤昭二が函館に転任、後任会長として田中茂八（難波繁太郎）となり、例会も三〇名を超えることもあり、新十津川短歌会との交流会を行うなど躍進を続けていた。

昭和三十八年、内部の諸種事情から滝川短歌をやめたいという声なども出て、その後、滝川短歌は休刊、合併号などあったようだが、昭和四十四年ごろまで続けられ、次いで「空知歌人」となって四十八年十月の秋期特集号のあと終刊となったようである。

なお、その間四十二年一月に合同歌集第二集「空知野」を出版、また、当時滝川在任の金坂吉晃が個人歌誌「北線」を同年十一月に発行、翌年四号を出して終わっている。

現在グループとしては江部乙短歌会、砂金支部、原始林支部、新墾支部があり、それぞれ月例歌会を持っており、滝川文学の中核となつて、裾野のひろがり力点を集中しながら、山頂にむかつて前進している。

滝川歌人会作品より

歩みつつふと見返ればあなたふと光りつつ山の暮をむるなり

金子 協平

時雨道濡れつつ遠く歩み来て人に逢ふべく髪ととのふる

干場 のぶ子

田のかたち残れるままに植樹され此の沢に人は住まずなりたり

藤森 蝶二

高校を卒えたる甥が農継ぐとうなづきし夜の柔かき耳朶

藤森 とみ子

たばしれる霰の後をみせの中に救ひのごとく陽のさしきたる

金坂 吉晃

子育てに明け暮したる故里の家の跡地も駐車場となる

松沢 つる

四季の風凜く流るる街なかに祖霊のことば今も弔す

岡山 去風

雪しろく埋めつくせし空知野に鳥止めていまだなじまぬ一樹

岡山 みつ恵

追分けの揃ふリズムに送られて帰らぬ旅の翁ほほえむ

大草 清舟

雪かさの日々減りゆきて心せく室にこもりて縫物仕上ぐ

堀田 こふみ

雪山も川面もあした霏だちて空知の川は氷解け初む

坂田 牧羊

一様に防風林は傾きてこの地拓きし苦節を示す

宮治 とし子

ピンネシリに雲がかかれば雨と言ふその山見つつ住み古りしかな

野田 牧聖

嵩低くなりしと思ふ寝姿の裾をたたきて妻われも寝む

金子 知咲江

つきつめて生を思へば暗闇を過ぐる夜風のごとく寂しき

岩城 正

江部乙短歌 江部乙における短詩型文学の活動は古くから活発

で遠く明治の後期から続けられているが、一つの団体としてのまともには大正末期ごろであった。

終戦後、隔月ではあったが歌会が続けられ、昭和二十三年に合同歌集「さわらび集」が発刊、次いで翌二十四年には、短歌紀元江部乙支社発行の合同歌集「雪」が発刊された。

その後、合同歌集の発刊はなかったが、各所属結社で活躍、時お

り歌会を開く状態であった。

昭和三十二年なり、河原正雄、青木修、西川福太郎等が中心となり歌会開催を提唱し、同年三月十七日北辰中学校で合同歌会が開かれ、機関誌「江部乙短歌」編集責任者河原正雄、印刷発行西川福太郎で発刊、その巻頭言に河原正雄は「歌を愛し、歌を作ることによって自らの生活を昂め、また深めようとする人達の集いとして江部乙短歌会の結成を見た。(中略 私達はいふ所の歌人でないかも知れない。けれどもそのことで何のてらいも又卑屈になることもない。お互いの毎日の生活を、そのくらしの中で生きる喜びを、悲しみを歌い続けていけばよいのに、云々」と述べている。

昭和三十九年四月、「江部乙短歌会」を「江部乙短歌連盟」と改称し、代表に河原正雄、事務局に嘉見光義を選出し、会則を定め広く会員をつのり新発足することになった。

爾来活発な作歌活動が続けられ、特に「砂金」同人金坂吉見の江部乙転入の影響は大きく、また女性歌人の進境著しく特に川端みつえ、嘉見照子の入賞などが目立っていた。

長い歴史と伝統を誇りとする江部乙短歌は、弛むことなく前進し大きく羽ばたこうとしている。

作品に見る江部乙短歌の変遷

飯ごとの父になる子は父のする険しき顔をして坐り居る

(大正14)

堀 恭一

昼顔に荷駄馬一つゆきにけり田をしらじらと追いかくる雨

(大正14)

福住 一郎

妻は妻としての愛情を取戻し生活へのけじめを幸福なものに近づける

(昭和9)

前田 唯承

はるか湖水の風景に地球はまると思ふ葦であった

(昭和9)

岩橋 恒男

何でも喜ぶ子供であったのにみぎくらの花のま白い盛りをあふいでしまふ

(昭和12)

河原 正雄

祖国への思いは一本の樹からもくる白樺の幹に触れて泣けそうなる

(昭和21シベリヤで) 嘉見 光義

ひと夜さの嵐も風ぎぬ牛追ひて牧にかかれば遠く海鳴る

(昭和23)

増永 小城

夫もなく子もなく生きてサボテンの二十あまりにそそぐ愛情

(昭和33)

柳瀬 恵美子

納屋の裏の雨戸一日はずされて馬の顔長く春の風吹く

(昭和40)

田中 ちえの

乾燥機見張りて徹夜する吾子の燈がもるる寒き納屋より

(昭和43)

田中 きみ

吾の知らぬきびしき埒のうちに生くる夫かと広き額視つめゐる

(昭和46)

嘉見 照子

空と海の色溶け合へる果にして奥尻島のくきやかに見ゆ

(昭和50)

井上 寿子

眠な力衰へゆくも生活ゆゑ昼を灯してけふも針持つ

(昭和50)

白杵 智恵子

犬連れて駆け抜けし子は穂芒の光の中に紛れゆきたる

(昭和51)

川端 みつえ

どのような未来を握りしめゐるや拳をふりて泣くみどり児は

(昭和54)

武田 照子

滝川文学

滝川文学同人会結成総会が行われたのは、昭和二十四年の暮ごろで、機関誌名を「文苑」と決め、創刊号を孔版印刷で

二十五年二月一日に出したが、第二号発刊の同年四月一日より「滝川文学」と改題、昭和二十六年十月二十日発行の第八号「平和特集号」までこの名が用いられてきた。

誌名は第九号になってまた「流域」になっている。町内の同人が遊学や転出で減り、町外から同人を広く求めようとしたことなどから青年思想懇話会以来の由緒ある誌名なのである。

八号から活版印刷となり、昭和二十八年八月発行の第一一号で終わっている。全般的な創作上の行きづまり、この転機を乗り越えないうまま自然消滅してしまったのである。

滝川文学で活躍した主な同人は、木津川照夫（詩・小説）、律己治郎（詩）、城茂樹（詩・小説）、見上勇逸（詩・エッセイ）、管はじめ（伴哲夫詩）、野崎末隆（詩）、大木良（藤井多喜男小説）、渡辺恵美（短歌）、八尋時男（平田登喜男詩）、盤井茂雄（渡辺茂雄詩・短歌）、須賀三郎（坂尻貞信詩・小説）、荒木享（詩・エッセイ）、壇真橘（詩・小説）、田村美昭（詩・小説）、森田豊三（小説）、後藤好子（短歌・詩）、抽木衆三（川波武男詩・評論）、吉田勝太郎（詩）、吉田たけを（詩・小説）、新谷勇（詩）、木津正（詩・小説）、鶴喜眸夫（詩・小説）など。

昭和四十一年十一月三日の文化の日、「文学サロン」という会合が開かれ、総合文芸誌の発行を決定、名称を我々の先人が昭和二十五年出した「滝川文学」の誌名を継承し、その復刊とし、会名を「滝川文学懇話会」と決め、創刊号を四十二年三月に出して以来年二回着実な発行を続けてきた。

部門を創作、詩、短歌、俳句、川柳とし、会長吉田えいじ、副会長ひだの淡二、田中茂八（難波繁太郎）、事務局野田牧聖で、各ジャンルから同人を出し、それに賛助会員と会員をもって体制を整え、作品については、投稿されたものを全部そのまま掲載するのではな

く、同人以外の作品については、各同人交代で選考し最少限の添削も行い選評を書き、作品応募は空知はもとより道内有志にも発表の機会を提供している。

経費については公費助成に依存しないで、同人費、賛助会費、会費、誌代と若干の広告料でまかない、運営にあたって、会議、同人会、役員会は編集会議を兼ね、毎回原稿不足に苦勞することなく、同志の協力和融和に支えられ、今まで一度の遅刊、欠刊もなく定期刊行されてきたのである。

昭和四十六年、江部乙町が合併で会員もふえ、五十年十一月に十周年を記念して合同作品集「いぶき」を一八号として発行などのほか、今までの歩みで特記すると、短詩型ジャンル各一名の滝川文学賞贈呈、郷土作家による文学作品出版記録や作家紹介、開拓の記録や随想編集、市内児童・生徒作品欄の設定などが挙げられる。

また、昭和五十三年十月八日に、本会が中心となり、石黒白萩の俳句句碑を滝の川公園に建立した。

今や、同人四〇名、賛助会員二〇名、毎号投稿者約百名が七〇頁前後の線を維持し、「滝川文学」の灯をともし続けている。

滝川の川柳 昭和二十七年ごろ、根井冬壺を中心とする川柳の会があり、冬壺のほか東田夢骨、野崎凡太郎、酒井武、本山哲朗、工藤胡里、西村きみ枝、中山よし春などが時折り集まって作品の発表をしていたが、いつまで続けられたかは不明である。

昭和三十九年九月十二日市内川柳同好者が、滝川川柳社を結成、市文化協会へ加入した。

広く各地川柳社との交友を深め、親睦を図り、四十五年から空知親善川柳大会なども開き、現在は砂川・滝川・美唄・深川とまわり番となり四年に一度、大会が各地で行われている。

川柳作品より

砂の塔でいい構図だけ引き
どちらでもいいのが旗を振っている
喪の家の光り明るし台風過
笑う事忘れて夏の塾通い
イメージの身勝手思う初対面

斉藤 正人

作業衣に似合う勲章なら欲しい
満腹になると変つていた答え
さくらさくらどこかで砂の塔崩る
臓の腑がきりきり痛む勝いくさ
傷だらけの旗がためぬ父の刑

竹内 茶目坊

(昭和四十六年度全道川柳年度賞受賞作品)

ウソ一つ消して夕日へ今日終る
雑草になれと父の語背に受ける
負け犬にされて亀で行く宮仕え
抜け目ない男の舌に虚飾積む
頂点の猿知恵と居るさらし首

滝川文学「川柳」の作品より

定年へ年賦の付いた家が待ち
玉入れの籠立ててる子上見れず
日照権犬小屋の位置変えてやり
逢うも風別れるも風男みち
石蹴れば石まで馬鹿と靴の私語
唾を吐くように値上げの話出る

相馬 冬雨楼

相馬 冬雨楼

相馬 冬雨楼

相馬 冬雨楼

新川 毒多

本山 哲朗

斉藤 正人

竹内 茶目坊

大橋 政良

第三章 社会・文化活動

子等の夢きく盃のまるい月
澄んだ瞳の母には勝てぬ口答へ
温ったかい記事一頁ほしい日日
離農して土の匂いがまだとれず
衣食住足りてしあわせ物足りず
名曲のかずかずを生む母の皿
感激の握手互いに両手出す
ひる顔の昼に咲けない修羅阿修羅
子守唄背などで未来の夢が寝る
親と子の対話へ温い灯がともる
恋すればロマンチックな雨となり
火遊びが心のヒューズすりきらす
泣かれたら送ってゆく気孫を泊め
それぞれに天狗を気取り胸を張り
血統のランプがつかぬ土方部屋

佐藤 正
横山 紫浪
松尾 順録
田中 忠幸
夏海 ぶんじ
斉藤 栄
野田 亜沙
西田 れい子
木下 節子
竹原 絹枝
谷口 シズ
大久保三良
柳川魚々子
島田 潮
曲線 立歩

滝川詩話会 滝川文学が創刊されて、約一年半ほどたった昭和

四十三年十二月、滝川詩話会が誕生した。

会長浅野明信、事務局長須田五郎を初めとして三十名余りの会員には、教師あり、サラリーマンあり、主婦あり、勤労青少年ありで多彩な人員構成であった。

活動はささやかなものであったが夢と熱情をもって会報は毎月一回確実に出され、ザラ紙にタイプ印刷の粗末なものであったが、会員作品、現代詩鑑賞、作品批評などをのせて配布され、毎月第二土曜日の夜、青少年ホームで例会を開いた。

昭和四十五年四月、滝川詩話会の会報に「カタパルト」という名称がつけられた。詩話会をひとつの発射台として、各自のめざす美しくもあり苦しくもある宇宙に向かって飛び立って行こうという意

味がこめられていた。

こうして「カタパルト」は滝川文学の土壌から育ち一人立ちし、会員の出入りも多かったが、会報は順調に五六号を数え、五年半の歳月を歩み続けた後、会員の必然的な希求により、各自のめざす詩の世界の発展をはかるため、同人詩誌「かたぼると」として体裁も内容も一新して生まれ変わったのである。

昭和四十九年三月、詩誌「かたぼると」は代表須田五郎の他、城茂樹、山田和平、木津川昭夫、高崎謹平、大広行雄、雪原立、生田四郎、伊藤恵子、藤むらさき、安達葦子、宮本千晶、松島日差子のメンバーで新発足した。年四回発刊の季刊とし五七号から七六号まで編集部交替制で定期刊行を続けたが、残念ながら五十四年から一時休刊の止むなきに至っている。

この間、「かたぼると」の詩活動は、会報時代には年間アンソロジーとして滝川詩集を四集発刊、詩誌になってからは何度か特集を試み、旅・愛について・戦争・川などのテーマであった。

その後、五十五年の春になって、雪原立は「かたぼると」の復刊を待ちきれず、大広行雄、式部博子の参加を得て「乱気流No.1」を創刊した。

「かたぼると」作品中より

白い旅―雪まつりに―

舞い落ちるポラリスの破片を集め

固化した夢を塑型する北方の遊戯

うつろな眼を見開くビルの群に囲まれて

立並らぶ束の間の白い巨像たち

群れつどう人の去った後で

城 茂樹

真夜中の月光に照らされて

ひそかにざわめくものの冷たいわらいを見たものはいるか
ひととき白い邦をつくるもの

やがて跡なく消え去るもの
天空に還り雲となり

大地に滲み入りのちとなるもの
崩されて白く散らばる結晶体となった時

雪よ君は君の季節をまもれ
白い幻影となって地平線の彼方に向え

北の寒冷イオンに冷やされたライフルを構え
君は

まだ遠い春をはるかに狙撃せよ

松島日差子

指紋の掬
めざめが悪いのは
子供の頃からのわたしの掬

朝の電話
遠距離のシンセキからはやばやと
ややこしい掬がもちこまれる

この話はこちらが先に知っていた筈です
本当は先に知るべきなのはそちらです
連絡はむこうからそちらへ

挨拶はそちらからこちらへ

ハイ ハイと言う返事のように

順序よく受け取めなければ
電話のコードのように声がよじれる

まっすぐな話も ぐねったことばも
一枚のオブラートにつつんで

お嫁にきた最初からのみこんだ
やさしさという掬

じゃあね おげんきで
切った受話器に 切っても切れないものが

敵然と
指紋のように残っている

信頼感とか知性とかから
すこしはなれてつながる

同族という掟

動かし難いそのように

わたしの指の末端にも

ひとたばの血の糸が

結び目のような輪をきざむ

ニセコ2号

上り ニセコ2号は ネムロ始発のハコダテ行き

下り ニセコ2号は ネムロに戻って来ない

だから 上り八・三〇ニセコ2号は

とびたつてばかりいる

朝 ニセコ2号は秋サケのような腹をみせ

ネムロ半島を反転

海霧になでつけられた叢林に這入り込んで行く

浸蝕台地の森林は

牧草畑にかりこまれ かまひげのように残っているが

低くはったそのしがらみは

ペンチでむしらなければとれない剛毛だ

薄青く澄んだ空

裸電灯花咲がに売店あかあかと誘い寄せ

煮たてた蒸気は拡散

どこにも行きようのない終着駅の乗客が降りて来て

かきの香を吸い 胸に残して来た空気を吐いて行く

細長い積木のようなネムロ駅

兜の前立みたいな緑色駅名看板

灰色がかった海の地平を見降しているが

帰って来て出て行く人をのみこむ小さな入口を

屯する漁船 うす茜色に輝き見あげている

「市民文芸」作品中より

須田 五郎

—詩—

こころ

心 心 心

一体何であらう

一見かほりも色も形もなく

それでいてたえず揺れている

風のようにどんな小さなすき間からでも

入りこむ

そして何色にでも変色する

ある時は淡色に ある時は暗黒色に

なのに私の心は表形だけで

内面は乾き切った乾物なのです

喜怒哀楽 何でもいい

うるおいの一滴がほしい

風にそよぐ生命の粉末を恐れ焦燥する

九条武子の来村

九条武子 夫人は明治二十年十月二十日、真宗

本願寺派管長大谷光尊の二女として
生まれた。

明治三十九年九月六日、本願寺派

二十二世管長大谷光瑞裏方大谷壽子

が本道各地巡回のおり当地に立寄

り、武子一九歳で結婚前大谷武子と

いわれた頃、同伴して来村、大野長

太郎宅に一泊した。

京都に帰ってから送ってきた短冊

の一枚は光暁寺に、一枚は大野純一
が所蔵している。

長谷部ユミ

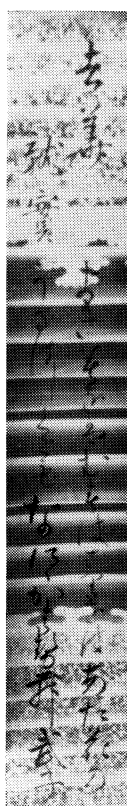


よきみをばむすはざりせはあだ花の
うるはしくともなにかはせむ



九条武子の来村

明治四十二年九条良隆男爵に嫁
いだ武子の生涯は、決して幸福な
ものではなかったが、信仰に生き
歌道に胸の響きをあらわし、昭和
三年二月七日四一歳でその生涯を
閉じた。



九条武子の
短冊(右)
(小樽市精一
大野所蔵)

第五節 社会活動

滝川市郷土研究会 昭和三十一年二月二日会則を設定し、郷土文
化の調査と保存を中心に、滝川地方の町史、市史に登場しなかった

人々の業績を発掘し記録を残す目的で、埋もれた郷土史発掘、資料
の蒐集など郷土研究に熱心な人々により実際活動が進められ、市の
開基七十五年記念行事や、道の開拓記念物調査、さらに高畑資料の
整理保存など数々の業績が積みあげられていた。

昭和四十年秋、組織的な活動展開を発足することになり、十月
三十日、創立総会を開き会長三浦光正他副会長、運営委員、研究委
員を選任、アイヌ語で「滝のある川」（滝川）を意味する「そうら
つぶち」の創刊が四十一年六月に行われ、その後滝川地方の文化、
教育、行政、スポーツなどエピソードの宝庫として、期待されなが
ら春・夏・秋・冬の巻として発行は順調に続けられてきた。

しかし、四十六年ごろから一時は一五〇名程度いた会員も半減、
年額七〇〇円であった会費も徴収たな上げとなったままの中で、四
十七年三月には「屯田特集」を出し、屯田兵開拓で開けていった滝
川と江部乙の合併に至る興味ある裏話などが披露された。

でも、同年六月の総会には出席わずか八名、第二一号について編
集委員を計画したが流会、延期などで発行計画が宙に浮くこともあ
ったが、三浦会長以下有志の熱情と「郷土研究の灯を消すな」と市
民の継続を望む声が強まり、四十九年三月、三年ぶりに第二一号
「滝川と江部乙の分村・合併」が発刊されるに至った。

現在第二五号（昭和五十四年三月）が発刊、市民の理解、協力のも
と、今後さらに充実したものへと意欲をもやしている。

会長 三浦 光正 昭和四〇・三
事務局長 三浦 光正 昭和四〇・三
（現在）

事務局 滝川市新町三丁目八一二〇滝川市郷土館内